

ルモ常ニ確定ノモノナル許多ノ事業ヲ包含セスレ  
 テ只一ノ目的ノ爲メ一又ハ數多ノ事業ヲ有スルモ  
 ノナルキハ右事業ノ成就ハ當然ニ會社ヲ結了スル  
 モノトス○故ニ結社ノ目的廣濶ナル土地ヲ買入レ  
 巨館、兵營、官廳等建築用ノ爲メ右地所ヲ分割シテ再  
 賣スルニ在リトセン乎會社ハ右事業ノ完結ヲ以テ  
 終了ス可キナリ  
 又法律ハ右事業ヲ完結シ能ハサル場合ヲモ爰ニ附  
 説セリ即チ其第一ノ場合ハ土地買入レヲ爲スレ能  
 ハサルカ又ハ土地ヲ買入レタル其賣ラントスル分

割部分ノ獲得者ナキノ場合ニシテ第二ノ場合ハ軍  
 隊又ハ官廳ニ於テ土地買上ケ契約ヲ取消シタルノ  
 場合はレナリ

第三項 第三ノ場合ハ己ニ提出シタル會社資本即  
 チ己ニ實行シ己ニ利益ニ依リテ増額アリタル又ハ  
 否ラサル供資ノ全額又ハ其大半ノ減盡シタルノ場  
 合ナリ○蓋シ會社資本ナルモノハ會社事業ノ器械  
 ニシテ若シ之レカ缺乏アルニ於テハ最早會社事業  
 ニ從事スルヲ能ハサルモノナリ焉ソ其成立ヲ伸長  
 スルノ理アラフヤ加之會社資本ノ大半減盡スルニ

於テハ之レニ依リテ生ス可キ會社事業ノ錯雜ヨリ  
 會社殘存ノ資本上ニ損失ヲ來スノ恐アル可キナリ  
 第四項 又時トシテハ社員中一人ノ供資ハ即時ニ  
 一纏メニテ實行スルモノコアラヌシテ或ハ會社ノ  
 管理、會社ノ會計事務ノ如キ役務、或ハ地所又ハ家屋  
 ノ使用ノ如キ收益ヨリ成レル供資ニシテ引キ續キ  
 テ提供ス可キモノナルコトアル可シ即チ此場合ニ於  
 テ社員右等ノ義務ヲ負擔シタル者其義務ヲ履行ス  
 ルコト能ハサルハ則チ其供資ヲ實行セサルモノニ  
 シテ會社成立原素ノ一ハ虧缺シタルモノナリ

然レモ本項ヲ以テ社員中一人其義務ヲ履行セサル  
 コトヲ想像セシ次條ノ第三項ノ場合ト混同ス可ラス  
 即チ次條ノ場合ニ於テハ少クモ對價物ヲ以テ其義  
 務ヲ履行シ得可キモノナレハ當然ニ會社ノ解散ア  
 ル可ラサルモノニシテ只解除訴權ニ依リテ會社ヲ  
 解散スルナリ之レニ反シテ爰ニ想像セル場合ハ社  
 員其義務ヲ執行スル能ハサルモノニシテ之レヲ以  
 テ該社員ヲ責ムル能ハサルノ場合ナリ例ヘハ社員  
 會社ノ管理ヲ欠キタルハ其疾病アルニ因リタルカ  
 又ハ會社ノ繼續中収益ヲ供ス可キ家屋ヲ破毀セシ

ハ抗拒ス可ラサル力即チ變災ニ出ラタルモノナル  
 時ノ如キ即チ是レナリ  
 第五項 商事會社ヨリハ民事會社ハ一層社員其人  
 ノ信用ニ基キテ組成セルモノニシテ是レ即チ社員  
 互ニ知り合フヲ以テ共同ノ目的ニ付テ其利益ト其  
 カトヲ結合セルナリ  
 是レニ由リテ之レヲ見レハ則チ社員中一人ノ死去  
 ハ現存ノ社員ノ爲メニモ其利益トカトノ結合ヲ毀  
 損セルモノナルヲ了解ス可シ  
 社員中一人ノ能力ヲ大ニ變更スル或ル事變ニ付テ

モ亦同一ナリ即チ其第一ハ精神ノ虛弱ヨリ出テダ  
 ルト處刑ノ結果ヨリ來リタルトヲ問ハス禁治產者  
 ト爲リタルノ場合ニシテ縱令ヒ禁治產ヲ受ケタル  
 社員支配人ナラスト雖モ或ハ決算ノ檢査利益ノ分  
 派或ハ共同ノ意見ニ附ス可キ決定ノ如キ各社員ト  
 右社員トノ間ニ生スル關係上ニ一大影響ヲ及ボス  
 可キモノニシテ且ツ右等ノ關係ニ至リテハ該社員  
 ノ代人ヲ以テスルモ絶ヘテ之レヲ定ムルヲ得サル  
 可キナリ

若シ社員中ノ一人分散又ハ判明ナル即チ公ケナル

無資力者トナリタル時モ亦同一ナリトス即チ己上ノ場合ニ於テ該社員ノ權利者ハ會社事業ニ干與スルノ權利ヲ有ス可キモノニシテ是事タル他ノ社員ノ利益及ヒ便宜ニ違フタルトナル可キヲ以テナリニ故ニ以上三個ノ場合ニ於テ社員中一人カ早ク己ニ斯ノ如キ地位ニ陥リタルカ又ハ早晚斯ノ如キ地位ニ陥ル可シト豫見セルモノトスルニ於テハ他ノ社員ハ該社員ト共ニ結社スルヲ承諾セサル可キモノナリトノ故ヲ以テ會社ヲ解散スト云フヲ得可キナリ

社員タル一婦人婚姻ヲ約シタルニ因リ之レカ爲メ生シタル無能力ノトハ茲ニ解散ノ原由トシテ見做サ、ルナリ

佛蘭西ニ於テ結婚シタル婦人ノ無能力ノトハ充分夥多アルモノナリ而シテ結社契約ヲ爲シタルトニ未婚婦若クハ寡婦タリシ社員結社後ニ至リテ婚姻ノ契約ヲ爲セシモ之レカ爲メ其社ノ解散スルモノニアラス

此第五項ニ舉示シタル會社解散ノ諸原由ハ資本ヲ株式ニ分ナタル會社ニ適用セス而シテ又社員其人

ヲ主トシテ組成シタル會社ニ於テモ第七百九十五條ニ陳述セルカ如ク社員ノ合意ヲ以テ此等解散ノ原由ヲ除却スルコトヲ得可シ

第七百九十三條 左ノ場合ニ於テハ會社ヲ解散スル

コトヲ得可シ

第一 何レノ場合ニ於テモ會社ノ解散ヲ社員一統同意シタル時

第二 社員中ノ一人其社ノ解散ヲ欲シタル時但シ會社ノ繼續時期ヲ明瞭又ハ暗黙ニ定メアラサルキニ限ルモノニシテ且ツ解社ノ請求ハ惡意ニ出

テタルモノナラス又其社ノ爲メ不適當ナル時ニ爲シタルモノナラサルコトヲ要ス

第三 社員中ノ一人其義務ヲ執行セサルニ基因シテ結社契約ノ解除ヲ訟求シタル時

第七百九十四條 社員其社繼續時期ノ滿タサル前ニ

明瞭又ハ暗黙ニ其時期ヲ延スコトヲ得可シ

暗黙ノ延期ハ又會社ノ繼續定期滿タタル後ニモ爲スヲ得可キモノニシテ其延期ハ其社ノ滿期後尙ホ社務ヲ繼續スルモ社員中何レヨリモ之ニ對シテ故障ヲ述フル者アラサル事實ヨリ生ス可シ但シ此

場合ニ於テハ第七百九十三條第二項ニ從ヒ社員中一人ノ意思ヲ以テ其社ヲ解散スルヲ得可シ

第七百九十五條 會社ノ資本ヲ株式ニ別チ其讓渡ヲ許容シアル場合ニ於テハ第七百九十二條第五項ニ指示シタル解社原由ノ一カ株主中ノ一人ニ到着スルモ之レカ爲メ(其社ノ)解散アラサルモノトス  
其他ノ會社ニ於テモ亦己上ノ原由ヲ以テ會社ヲ解散セシテ其原由ノ爲メ社員タルヲ止メタル者ノ部分ヲ規定シタル上他ノ社員ト其社ヲ繼續ス可キト或ハ又死去シタル社員ノ相續人又ハ無能力者若

クハ無資力者ノ正當ナル代人ト其社ヲ繼續ス可キ  
トテ合意スルヲ得可シ

註解

第七百九十三條 本條ニハ總社員若クハ一名ノ社員ノ意欲ニ因レル解散ニシテ意欲上即チ隨意ノ解散ト稱シ得可キモノヲ揭示セリ而シテ意欲上ノ解散ハ當然即チ法律上ノ解散ニ照應スルモノトス  
意欲上ノ解散ノ場合ハ夥多アルモノニ非スシテ第一ノ場合ヲ除クキハ何レモ甚タ簡單ナルモノナリ  
先ツ最初ニハ總社員一様ノ意欲ニ出ツル場合ナリ

勿論此場合ニ於テハ合意ノ自由ハ完全ナルモノニシテ凡テ會社ハ何レノ場合ニ於テモ總社員ノ意欲ヲ以テ解散スルコトヲ得ルモノニシテ是レ即チ法律カ「何レノ場合ニ於テモ」云々トノ語ヲ以テ説明スル所ナリ

意欲上ノ解散ノ第三ノ場合ハ既ニ説明セシ所ニシテ即チ普通法ノ適用ナリ而シテ是レ一社員己レニ責メテ歸ス可キ虚偽ノ原由ニ因リ其義務ヲ盡サ、ルコトニ基キタル解除ノ訴權ナリ此ノ如ク義務者ノ過失アルコトハ則チ此場合ト前條第四項ニ豫定シテ

ル場合トヲ區別ス  
右解散ノ第二ノ場合ハ一層注意ヲ爲ス可キ場合ナリ此場合ニ於テハ會社ヲ解散スル爲メ社員一名ノ意欲ヲ以テ充分ナリトス

此解散ノ原由ニ付テハ左ノ三個ノ條件ヲ必要トス  
第一 會社ハ明瞭又ハ暗黙ノ定期ヲ有セザリシコトヲ要トス何トナレハ若シ此定期ヲ有セシルハ其期限ヲ待ツカ又ハ前條第四項及ヒ第五項ニ掲ケタル原由ノ一ニ關シタル解散ニ基カスンハアル可カラ  
ス○然レモ會社無限ノ期限ヲ有シ且ツ一箇又ハ數

箇ノ確定事業ニ止マラサルハ(若シ確定事業ナレハ仮令ヒ不憚カナルモ一箇ノ暗黙ナル期限ヲ構成ス可キモノナリ)社員ハ畢生間會社ノ關係中ニアリテ終始義務ヲ負擔ス可キモノニシテ即チ社員ノ通常ノ利益ニ反スルモノナラフ故ニ社員中ノ一名カ會社ノ事業ヲ終了セント欲スル程ノ多クハ憚カナル異論即チ不同意ヲ生スルニ至ル可シ

第二 此解散ハ善意ヲ以テ請求スルヲ要シ之レヲ請求スル社員カ自己ノ資本若クハ自己ノ勞働ニ付キ一層有利ナル使用ヲ發見セシニ據ルヲ得ス

第三 右ノ請求ハ不利即チ機會ヲ失シテ爲スヲ得ス蓋シ若シ商業上、財務上若クハ策畧上危迫ノ時機ニ於テ清算ヲ爲スルハ財産ヲ賣却スルニ好カラサルノ結果ヲ生スルニ至ル可ケレハナリ又會社若シ好結果ヲ得ルノ近キニ在ル可キ犠牲ヲ爲シ而シテ其好結果カ之レヲ獲ル前ノ解散ニ因テ妨害セラレ、ル、ルニモ亦右ノ請求ヲ爲スル不利ナリトス

此三箇ノ條件ハ即チ佛蘭西法典(第千八百六十九條及ヒ第千八百七十條)ニ要求スル所ナリ

我草案ハ定期會社ニ付キ「正當原由」ニ依據シ一名ノ



社員ノ意欲ヲ以テ解散ヲ許シタル佛蘭西法典第千八百七十一條ノ條例ノ同一ノ條例ヲ有セス是レ蓋シ凡テ正當原由ノ場合ハ前條第四項第五項及ヒ本條第三項ニ於テ充分ニ豫定シタレハナリ

第七百九十四條 定期ノ滿ツルニ因テ會社ノ解散スルコトハ公ケノ秩序ハ勿論尙ホ其他ノ原由ニ關スルニ非ス故ニ社員等ハ此定期ヲ延ハシテ會社ノ解散ヲ防止スルコトヲ得ルナリ○該解散ノ延期ハ滿期前若クハ滿期後ニ行フコトヲ得可シ

第一 滿期前ノ延期ハ常ニ當然之レヲ行フモノニ

シテ又殆ント常ニ明瞭ニ實行セラル可シ然レトモ亦其延期ヲ暗黙ニ爲スコトヲ得例ヘハ會社及ヒ其事務所ハ該社設立ノ期限ト同一ノ期限ヲ附シテ借受ケタル場所内ニ設置アリシキニ方リ此場所ノ賃借ヲ多少永久ノ時間ニ向ツテ更新セシキノ如シ○然リト雖モ其場所ノ賃借ヲ更新スルニ方リ六ヶ月若クハ一年間ニ過キサリシキハ元來此期限ハ結社期限ノ終了セシ後チ該社ノ清算ノ爲メニ定メタルコトアル可キカ故ニ乃チ之レヲ以テ結社ヲ延期スルノ意アリト爲スコトヲ得ス○若シ又借地ヲ益用スル

カ爲メニ農業會社ヲ設ケ而シテ其貸借ニ引續キテ  
更ニ其土地ヲ借受ケタルキハ其新貸借ニ付テ會社  
ノ暗黙ノ延期アリト見ル可シ

第二 一旦會社ノ期限經過シタルキハ該社ハ決シ  
テ暗黙ノ延期ヲ爲シタリトスルコトヲ得ス何トナレ  
ハ延期ノコトハ即時且間斷ナキモノタルヲ要スルモ  
ノニシテ即チ一名ノ社員タリトモ故障ヲ述フルコ  
トナク會社ノ事業ヲ繼續スルヨリ生スルモノナレハ  
ナリ此場合ニ於テハ社員ノ暗黙ノ承諾アルモノト  
ス此ノ如ク暗黙ノ延期アル片ハ其社繼續ノ爲メニ

更ラコ何等ノ期限ヲモ定メザリシニ因リ爾後其社  
ハ決シテ定マリタル期限ヲ有セサルモノト見做サ  
ル可シ是ヲ以テ該社ハ社員一名ノ意欲ニ因テ解散  
ス可キナリ

第七百九十五條 會社ヲ以テ人ヲ主トスル會社及ヒ  
資本ヲ主トスル會社ニ區別シタルコトハ吾人既ニ之  
レヲ説明セリ而シテ人ヲ主トスル會社トハ是レ人  
ヲ主トシテ組成シタルニ因リ又資本ヲ主トスル會  
社トハ殊更之レニ資本ヲ供シタルニ因ルナリ又資  
本ノ會社ニハ株式ニ因レル會社ノ名稱ヲ附シタリ

而シテ該會社ハ往々商事會社ナリ然レトモ民事會社ノ資本ヲ株式ニ分ツトモ毫モ妨ケナシ(第七百六十二條第二參觀)

本條ハ社員一名ノ死去又ハ其他第七百九十二條第五項ニ掲ケタル理由ノ一ニ因レル解散ヲ人ヲ主トスル會社ニ制限シタリ○凡ソ株主其人ヲ主トセサリシキ尙ホ或ハ會社組成ノ時ニ未タ知了セサリシ株主アルキニ其株主ノ死去ニ因テ其社ノ解散スルハ理ニ於テ當レリトセス○抑モ自己ノ株金ヲ會社ニ拂込ミタル株主共供資ヲ實行セシキハ爾後其社

ニ對シテ何等ノ義務ヲモ負擔セサルニ因リ毫モ其社ニ妨害ヲ加ヘス而シテ假令ヒ決算ヲ要スルコトアリトモ是レ既ニ株式ヲ有スル總テノ人、最初ノ株主又ハ其相續人ニ對シテ實行セラレタルモノナリ而シテ若シ株主中ノ一名治産ノ禁ヲ受ケ又ハ商事分散若クハ分散シタルキハ禁治産ノ場合ニ於テハ後見人其權利ヲ行ヒ、商事分散及ヒ分散ノ場合ニ於テハ權利者其分散者ノ權利ヲ實行スルモノトス  
 本法ハ解散ノ免脱ヲ以テ茲ニ吾人ノ論究スル事件カ株主中ノ一名ノ身上ニ生スル場合ニ制限スルノ

注意ヲ爲シタリ○是レ蓋シ結社契約書中ニ氏名ヲ明記セサル所ノ株主タル社員ノ外ニ氏名ヲ明記スル社員アリテ其一身ハ會社ヲ組成スルノ旨趣トナリ且ツ其者ハ通常該社ノ管理者タルヲ往々ニシテ是レアリ然ラハ則チ此ノ如ク己レノ一身ヲ主トセラレル社員ニシテ結社繼續ノ爲メニ定メタル時期到着ノ前ニ死去スルカ又ハ無能力者トナリタルキハ必スヤ其社ノ解散ナカル可カラズ

本條ノ第二項ハ第一項ヨリモ一層例外規則ノ擴張セリ而シテ假令ヒ人ヲ主トスル會社ニ關スルキト

雖モ社員中ノ一名カ死亡、無能力又ハ無資力ニ到ルモ會社之カ爲メ終了セス即チ該會社ハ其他ノ社員ト共ニ繼續スルヲ得可シ而シテ其死者又ハ無能力者ノ權利ハ事件到着ノ日ニ於テ該會社ノ解散セシモノトシテ規定セラル可シ何トナレタルモノナレハナリ

社員等ノ約束ハ尙ホ一步ヲ進メテ之レヲ實行スルヲ得可シ即チ死者ノ相續人等ハ死者ニ代リテ社員トナリ又無能力若クハ無資力ノ場合ニ於テハ其

無能力者無資力者ハ尙ホ社員タル身分ヲ有ス可シ  
 但シ決算ヲ實行シ又ハ發議ヲ爲スルニ方リ其後見  
 人若クハ權利者ノ代理スルハ此限ニ在ラス  
 注意○吾人ハ本項ニ於テ只首トシテ三款ヲ掲ケタ  
 リ即チ第一 會社ノ組織第二 會社ノ効力第三  
 會社ノ解散是レナリ○清算并ヒニ分派ノトニ至リ  
 テハ相續ニ於ケル清算分派ノ事項ニ送ラント欲ス  
 ルナリ然レモ人アリ吾人ニ注意スルニ相續事項ハ  
 尙ホ遠キニ在ルヲ該事項ノ規定ハ恐ラクハ他期ニ  
 送ラル可キヲ分派ニ於テハ數多ノ相續人アルヲ

想像セシムルヲ又相續分派ニ於ケル右ノ送讓ハ分  
 派ノ精神ヲ除却スル長子權ヲ原則上變更シ或ハ又  
 之レヲ廢止シタリト見做サシム可キヲ以テセリ  
 己上ノ理由ニ依リ吾人ハ會社ノ解散ニ續ク二個ノ  
 事務即チ清算及ヒ分派ニ關スル一款ヲ爰ニ附加シ  
 タリ

第四款 會社ノ清算及ヒ其財產分派

第七百九十六條 會社ノ解散後ニハ各社員又ハ其承

權人ヨリ清算ヲ請求スルヲ得可シ  
 會社ニ對スル權利者ノ多數ヨリ其社ノ財產分派前

ニ清算ヲ爲サンコトヲ求メタルキハ其分派前ニ右清算ヲ爲ス可キモノトス

註解

第七百九十六條 次條ニ於テ其目的ヲ詳説ス可キ清算ハ其語ノ本義ニ從ヘハ會社解散ノ際第三ノ人ニ對スル會社ノ位地及ヒ會社ニ對スル社員ノ位置ヲ判明ニシ、透明ニスルヲ旨トスル事務ノ集合体ト云フノ意ナリ

蓋シ清算ノコトタル實ニ當然ニシテ法律カ各社員清算ヲ請求シ得可シト説キタルハ則チ其權利者ヲ包

含シタル社員ノ承權人ニ社員同様ノ權利ヲ認知セントスルニ出テタルモノニシテ是事タル實ニ當然ニシテ且ツ必要ナリト云フヲ得可シ○即チ右ノ權利ハ權利者會社ノ權利者ノ資格ヲ有スルト會社ノ解散ニ依リ其社員一身上ノ權利者ト爲リタルトチ問ハス會社ノ權利者ニ屬ス可キモノトス然レモ清算ヲ請求シ且ツ之ヲ實行スレハ概チ分派前ニ在リ右ニ付テハ實際上ノ理由アルモノニシテ即チ清算ハ己ニ滿期シタル義務ノ辨濟ヲ包含シ且ツ權利者トノ一致ニ依リ尙ホ滿期前ナル義務ニ

モ擴張シ得可キモノナルカ故ニ會社能働高ノ超過額アルノ場合ニ於テハ權利者ノ辨濟ヲ終リタル後右超過額社員間ニ分派スルモノナレハ社員ハ最早會社義務ノ故ヲ以テ其部分上ニ受ク可キ負擔ニ付テ憂慮スルニ及ハストノヲ生ス可ク而シテ己上ノ事タル社員間ニ法律上ノ連帶ヲ認知シアルヲ以テ(第七百九十一條)會社義務ヲ辨濟セシ社員他ノ社員ニ對シテ追索スルヲ得ル場合ニ於テハ一層重要ナル可キナリ

然レモ或ル社員金圓ノ需用ニ迫リ直チニ會社資本ノ分派ヲ爲サント欲スルヲアル可シ○即チ右ノ場合ニ於テ法律ハ之レヲ抗拒セスト雖モ右ノ事務タル不便宜ヲ現出ス可キモノナルヲ以テ法律ハ社員ヨリ提出セシ分派ノヲハ其多數決ニ依リテ承認セラル、ヲヲ欲セリ

然ルニ爰ニテハ會社ノ定款中ニ豫定シアラサル方法ニ關スルモノナルカ故ニ法律ハ社員多數ノ贊成ニテ足ル可キヲ明言セサル可カラス然ラサレハ社員ノ全員一致ヲ必要トス可キナリ

第七百九十七條 清算ハ起業事務ノ終了(成就)會社ノ

負債ノ辨濟及ヒ其社ヨリ第三ノ人ニ對シテ有スル  
其債主權ノ完了、各社員ト會社トノ特殊ノ計算規定  
並ニ各社員分配ヲ受ク可キ能働高又ハ負擔ス可キ  
所働高ニ付キ其社員若クハ代理人ノ部分指定ヲ包  
含スルモノトス

註解

第七百九十七條 佛蘭西法典ニハ會社事項ニ於テ清  
算ノ下ニ記載セサルカ故ニ其何ノ故ニ成立スルヤ  
ノ下ニ至リテモ亦毫モ説ク所ナシ即チ清算ナル語  
ハ損害賠償事項ヲ除キテハ(第四百六條)日本法律中

ニ於テ慣用セサル所ナルヲ以テ會社ノ清算ハ果シ  
テ何ノ故ニ成立スルモノナルヤヲ指示スルハ最も  
其宜シキヲ得タルカ如シ

本條ニ於ケル他ノ書載ニ至リテハ只説明ノタメ愛  
ニ列記スルモノニ過キスシテ定限シテ記載シタル  
モノニアラサルナリ○然レモ此他ノモノニシテ必  
要ナル所爲カ爰ニ列叙セシ所ノ一ニ多少ノ關係ヲ  
有セサルハ又難キヲナルカ如シ

即チ吾人ハ右等ノ所爲ヲ左ニ畧説ス可シ  
第一 先ツ會社ノ爲メ其支配人ノ着手シタル事業



ヲ終了セサル可カラス○己上ノ事タル會社組成ノ  
 目的タル事業ノ成就シタルヲ以テ其社ノ解散アリ  
 タル場合ヲ想像セルモノニアラサルハ固ヨリナリ  
 又他ノ場合ニ於テ會社解散ノ際ニハ會社ノ請負ヒ  
 事業ノ如キ第三ノ人ト共ニシタルモノト收穫ノ時  
 ニ至ル迄繼續ス可キ已ニ着手シタル耕作事業ノ如  
 キ第三ノ人ノ干預ナクシテ會社一個ニテ爲シタル  
 モノトナリト問ハス常ニ着手シタル二三ノ事業アル可  
 キナリ  
 社業ノ結果ノトコ付テモ第三ノ人トハ只契約ノ協

議アリタルノミノ場合ニ於テハ清算者第三ノ人ト  
 共ニ契約ヲ確定スルニ及ハス是レ他ナシ斯ノ如キ  
 ハ會社ノ効力ヲ其必要外ニ擴張スルモノナルヲ以  
 テナリ

第二 仮令ヒ社業會社ノ終了ニ至ル迄昌盛シタル  
 キト雖モ常ニ會社ニ於テハ其事業ニ關シ第三ノ人  
 ト約シタル義務アリテ存ス可シ  
 右ニ關スル例證タル商事會社ニ於テハ最モ許多ナ  
 ル可シ若シ農業ニ關シタル民事會社ニ關スルモノ  
 ナルハ種穀、肥料、耕作器具ノ買入、耕夫ノ雇料、土地

ニ關スル修補又ハ改良ノ工ニ付キ起業者又ハ職人トノ契約アル可キナリ若シ又土地ヲ買ヒ入レテ再賣スルノ目的ヲ以テ組成シタル會社ニ關スルモノナルハ會社ニ於テ辨濟ス可キ義務ハ該土地買收ノ代價ナル可キナリ又償還ヲ受ク可キ債主權ニ至テハ多少清算中ニ包含ス可キコトヲ會得スル一層容易ナリトス蓋シ會社生産物ヲ賣渡シ、家屋若クハ土地ヲ賃貸シ、元金ヲ貸與シタルコトアル可キナリ執行難易ノ點ヨリ觀察テ下スルハ負債ノ辨濟ト債

主權ノ完了トノ間ニ法律上頗ル著シキ差異アリトス(我輩ハ事實ノ差異ヲ言フモノニ非ス)即チ清算人概テ期限ノ利ヲ拋棄シテ滿期前ノ負債ヲ辨濟スルヲ得可シト雖モ第三ノ人ヨリ同一ノ利益ヲ得ルニハ其承諾ヲ得サル可ラス(第四百二十四條)清算ノ最モ重要ナル處置ノ一ハ會社ト各社員トノ特殊ノ計算規定ナリトス○前既ニ一社員ノ會社ニ對シ或ハ義務者タリ或ハ權利者タルノ條項ヲ掲ケタリ○其義務者タルハ其供資ヲ實際支辨スルヲ遲延シ又ハ自己ノ事業ノ爲メニ會社ノ資本ヲ使用シ

又ハ其管理中失錯ヲ爲シタルキニ在リ又其權利者  
 タルハ會社ニ資本ノ立替ヲ爲シ又ハ會社ノ事業ニ  
 因リ自己ノ損失ヲ被フリタルキニ在リトス  
 清算人ハ此等ノ計算ヲ爲スニ方リ社員相互ノ要求  
 ヲ聽ク可シ又各社員其權内ニ在ル所ノ辨明ヲ爲ス  
 可キナリ

管理者ノ計算ハ常ニ規定ノ最モ困難ナルモノナル  
 可シ

此等ノ計算一タヒ終了スルニ至ラハ會社ノ繁榮レ  
 タルト否トニ從ヒ能働高ヲ分配スルカ又ハ所働高

ヲ負擔スルノ一アルノミナリ

分配ノ事ハ本節末條ニ之レヲ定ム(第八百二條以下)

第七百九十八條 結社契約ヲ以テ清算者ノ選任及ヒ

其權限ニ關スルノヲ定メアルキハ之ヲ遵守ス可  
 シ

其條款ナキハ全社員合併シテ清算ヲ爲シ若クハ  
 其中一名若クハ數名ノ社員ヲ選任シテ其清算ヲ爲  
 サシメ若クハ又社員ノ一致ヲ以テ選任シタル第三  
 ノ人ニ其清算ヲ爲サシムルヲ得可シ

若シ其選任ノヲニ付キ社員一致セサルキハ裁判所

ヨリ清算人ヲ撰任ス可シ

註解

第七百九十八條 時アリテハ會社清算者ノ撰任ノコ  
 并ヒニ右清算者權限ノコヲ結社契約中ニ規定シ置  
 グコアル可シ即チ此場合ニ於テハ他ノ場合ト等シ  
 ク右清算ニ關シタル合意ヲ遵守ス可シ何トナレハ  
 右ノ合意ハ純然社員各自ノ利益ニ關スルモノナレ  
 ハナリ

然レモ若シ結社契約中清算ニ關シテ規定セシ所ア  
 ラサルニ於テハ法律上右ニ關スル二三ノ規則ヲ設

定セサル可ラス  
 先ツ清算者タルハ果シテ何人ナリヤ○若シ社員立  
 會ノ上又ハ共同ニテ清算ヲ爲スニ一致セシルハ理  
 論上清算ニ付キ之レニ増シタル良方法ナカル可シ  
 然ルニ立會又ハ共同ニテ清算ヲ爲スルト雖モ實際  
 ニテハ社員各自ノ長所ニ從ヒ清算事務ヲ分任スル  
 ニ至ル可クシテ只各社員清算ニ於ケル難事ニ關シ  
 テノミ共議ヲ遂ク可ク而シテ各社員ノ利トスル所  
 ハ右清算ニ關シテ終局ノ認可ヲ與ヘサルニアル可  
 シ何ントナレハ右ノ清算タル其各部分ニ付テ己ニ

認可ヲ得タルモノナレハ別ニ之レカ總体ニ關シテ  
 認可ヲ與フルニ及ハサルモノナレハナリ  
 然レモ又共議ニ附ス可キ事件ノ許多ナル場合ニハ  
 社員間ニテ右ニ關スル協議整ハス爲メニ其目的ヲ  
 達スル能ハサルノ恐レアル可シ○是レ即チ社員其  
 共同社員中ヨリ撰任スルト社員外ノ人ヨリ撰任ス  
 ルトヲ問ハス一人ノ清算者ヲ撰任スル以所ナリ○  
 蓋シ法律ハ右ノ撰任ヲ爲スニ社員ノ全員一致ニ依  
 ルヲ欲セリト雖モ若シ右撰任ヲ爲スハ會社ノ定  
 款ヲ實行スルニ過キサルモノナルハ社員ノ多數

決ヲ以テ足レリトセリ(第七百七十五條參觀)然レモ  
 爰ニ説ク所ハ一個ノ新方法ニ關スルモノニシテ且  
 ツ此場合ニ於テハ會社ノ解散アリ最早社員タルモ  
 ノアラスシテ只未分ノ共同所有者アリテ存スルノ  
 ミナレハ右未分ノ共同所有者間ニ於テハ多數ノ意  
 見ハ少數ヲ支配スルノ効力ヲ有スルモノニアラサ  
 レハナリ  
 故ニ若シ社員ノ全員一致ヲ得ルヲ能ハサルニ於テ  
 ハ清算者撰任ノヲヲ裁判所ニ請求スルノ外ナシ○  
 而シテ右ノ撰任ヲ爲スハ會社所在ノ裁判所ナル可

キナリ○又裁判所ハ清算者トシテ社員又ハ第三ノ人ヲ撰任スルヲ得可シ然レモ若シ裁判所ニ於テ舊支配人ヲ以テ清算者ニ撰任シタルハ右支配人ノ決算ヲ精査スル爲メ他ニ特別ノ清算者一人ヲ撰任セサル可ラサルナリ

第七百九十九條 何レノ場合ニ於テモ清算者ハ會社所屬ノ物件ニシテ其毀損又ハ滅盡ノ速カナルモノヲ讓渡ス可シ

清算者ハ他ノ動産物ヲ讓渡ン得可シト雖モ辨濟期限ニ至リタル會社義務ノ償還ノ爲メ右讓渡ノ必要

ナルキニ限ル可シ

清算者ハ社員ヨリ委任ヲ受ケタル特權ニ據ルニアラサレハ不動産ヲ書入レ若シクハ讓渡スルヲ得ス

前項ノ場合ニ於ケル不動産ノ讓渡ハ公賣方法ニ依リテ爲ス可キモノトス但シ示談ノ讓渡ヲ許可シアル場合ハ此限ニ在ラス且ツ其公賣ニ依ルト示談ニ依ルトヲ問ハス右ノ讓渡ハ社員ノ多數決ヲ以テ定ム可キモノトス

清算者ハ全社員ノ名義ヲ以テ原告人又ハ被告人ト

爲リテ出訴スルヲ得可シ  
清算者ノ會社義務又ハ債主權ニ關シテ承諾シタル  
私和契約及ヒ仲裁契約ハ其第三ノ人ト共謀シタル  
詐欺アル場合ノ外攻撃スルヲ得サルモノトス

註解

第七百九十九條 清算者ノ權限ヲ定ムル狹隘ニ失ス  
可ラスト雖モ又清算者ニ與フルニ餘リ廣濶ニ過キ  
危險ナル權限ヲ以テス可ラサルナリ  
先ツ爰ニ法律ハ會社所屬ノ物件ニシテ其滅盡ノ(速  
カナル)モノヲ讓渡スルハ清算者ニ認許スル所ナリ

ト云ハスシテ清算者ノ義務ナリト云ヘリ蓋シ右速  
カナル云々ノ語ハ爰ニ最モ必要ナルモノナリ何ト  
ナレハ總テノ物件ハ大抵時ヲ經テ滅盡スルモノナ  
レハナリ○故ニ若シ農業會社ニテ清算ヲ爲スニ當  
リ未賣ノ菓物アリトセンガ清算者ハ實質上ニテ腐  
敗シ易ク又ハ價額上ニテハ失墜シ易キ右菓物ヲ讓  
渡セサル可ラス且ツ會社ノ耕業ニ從事スル間ニ獸  
類ノ受ク可キ注意ノ足ラサルカ爲メ倒斃スルヲア  
ル可キモノニ付テモ亦同一ナリトス  
他ノ動產物ニ至リテハ原則上之レヲ保存シ社員間

ニ分派セサルヲ得ス然レモ若シ會社義務辨濟ノ爲メ金額ノ不充分ナル場合ニハ清算者ハ其辨濟ニ必要ナル限度ニ達スル迄右動產物ヲ讓渡スルヲ得可シ然レモ法律上清算者ニ右ノ權利ヲ附與スルハ己ニ辨濟期限ニ至リタル義務ニ限ルモノニシテ清算者ハ尙ホ其期限前ノ義務辨濟ノ爲メ動產物ノ賣却ヲ爲ス可ラス是他ナシ期限ノ利益ニ於ケル右ノ拋棄ハ己ニ幾分カ社員ノ共同利益ヲ害スルモノナルニ尙ホ右ノ拋棄ヨリ動產物ニ不利ナル賣買ヲ生シタルモハ一層社員ノ利益ヲ害ス可キモノナルヲ以テ

ナリ  
 不動産ノ讓渡ハ其機會ヲ失スルニ於テハ動產ノ讓渡ヨリモ一層有害ナルヲアリ故ニ之レヲ清算者ニ許サ、ルニアラスヤ而シテ其之レヲ許スニ付テハ社員ノ多數決ニ因レル特別允許アルヲ要ス而シテ若シ示談ヲ以テ其處分ヲ爲スノ允許ヲ得サルモハ則チ公賣方法ヲ以テ賣却セスハアル可カラズ書入質ニ關シテモ亦特別ノ允許アルニアラセレハ之レヲ爲スヲ得ス  
 故ニ若シ清算者拂ヒ期限ノ到着シタル負債ヲ辨濟



セシカ爲メニ資本ヲ要スルモ書入質ナキハ清算  
 ス可キ會社ノ財産上ヨリ之レヲ使用スルヲ得サ  
 ルハ該清算者ハ書入質ヲ爲スノ許シテ得シカ爲  
 メノ請求書ヲ舊社員ニ差出スヲ要ス  
 舊會社ノ名義ヲ以テ第三ノ人ニ對シテ有効ナラシ  
 メントスル債主權若クハ第三ノ人ヨリ舊會社ニ對  
 シテ有効ナラシメントスル債主權ニ困難ヲ生スル  
 一往々ニシテ之レアリ  
 此際之レヲ決斷スルノ方法三箇アルニ過キス即チ  
 裁判所ヘ訴フルヲ和解ヲ爲スヲ若クハ仲裁人ニ依

頼シテ困難ヲ決セシムルト是レナリ  
 清算者ヲシテ特別ノ允許ナク原告人トナリ又ハ被  
 告人トナリテ訴訟ニ干與セシムルヲ適宜トスル  
 ヤ否ノコ又之レヲシテ和解即チ供給ヲ爲シテ争訟  
 ヲ避ケシムルコト又之レヲシテ仲裁人ニ争論ノ決定  
 ヲ依頼セシムルコト(仲裁契約ヲ爲ス)ヲ以テ適宜ト  
 スルヤ否ニ付テハ或ハ躊躇スル者アル可シ○而シ  
 テ茲ニハ是等ノ論決ヲ爲スニ止マル可シ  
 清算者濫リコ争訟ヲ爲スヤノコトハ深ク恐ルニ及  
 ハス蓋シ是レ清算者ノ一身ニ取リテハ煩勞及ヒ困

難ノ増加ニ外ナケレハナリ然レトモ若シ清算者毎月ノ慰勞金又ハ償金ヲ受取ルモノナルニ於テハ自己ノ職務ヲ奇貨トシテ之レヨリ利益ヲ圖ルカ爲メ其職務ヲ延長センヲ求ムルノ危険アル可シ○此危険ヲ治スルノ方法ハ社員等ノ注意ニアリ即チ社員等ハ終始清算者ニ對シテ其心算スル所ノ説明ヲ請ヒ且社員等ノ適宜ナリト思考スル處置ヲ主張ス可キト是レナリ

和解ハ之レト反對ノ危険ヲ提出ス何トナレハ慰勞金ヲ受ケサル清算者ハ其事務ヲ急速ニ終了セント

ヲ希望シ而シテ自己ノ負擔シタル利益ニ反對ノ供給處置ヲ甚タ容易ニ承諾スルニ至ル可キヤヲ恐レスンハアル可カラサレハナリ

仲裁契約即チ仲裁人ニ依頼スルルルノ危険モ亦殆ント同一ナル可シ何トナレハ尋常裁判所ニ向テ爲ス所ノ訴訟ノ遅延ト困難トヲ避ケンカ爲メ清算者ハ爭論ノ決定ヲ仲裁人ニ附スルヲ容易ニ承諾スルヲアル可ケレハナリ

茲ニモ法律ハ濫用ヲ醫治スル方法ヲ指示ス即チ云ハ、即時ノ所爲ニ關シテハ社員等ハ其所爲ノ成就

シタル後ニ非サレハ之レヲ知了セサルコトアル可キ  
 カ故ニ清算者及ヒ關係人タル第三ノ人ノ詐欺アル  
 キハ法律ハ社員等ニ和解及ヒ仲裁契約ヲ攻撃スル  
 ノ權利ヲ與ヘタルト是ナリ○而シテ其詐欺ハ社員  
 等ヲ害シテ直接ニ第三ノ人ニ利益ヲ得セシムルヤ  
 否ハ敢テ之レヲ必要トセス唯其和解契約又ハ仲裁  
 契約ヲ爲シタルハ清算者ノ柔弱心ニ因レルト且舊  
 社員ニ損害ヲ與フルトヲ以テ足レリトス

第八百條 清算者其清算ノ總勘定ニ付テハ社員ノ認  
 可ヲ受ク可キモノトス

清算ノ總勘定ヲ認可スルハ社員ノ多數決ヲ以テ足  
 レリトス

右ノ場合ニ於テ清算ノ總體ニ付キ又ハ特ニ其若干  
 ノ部分ニ付キ可否ノ投言ヲ爲ストヲ得可シ  
 清算所爲ノ中社員ノ承認セスシテ仕直ストヲ得ル  
 モノハ清算者ノ入費及ヒ取扱ヲ以テ其仕直シヲ爲  
 ス可キモノトス若シ又其所爲ハ仕直シヲ爲ストヲ  
 得サルモノナルキハ清算者ハ代理契約ノ規則ニ從  
 ヒ自己ノ過失ヨリ生シタル損害ノ責ニ任ス可キモ  
 ノトス

清算者ノ其委任ヲ受ケタル權限内ニ於テ又ハ前條ノ規則ニ適シテ爲シタル所爲ハ善意ナル第三ノ人ノ爲メ常ニ保持ス可キモノトス

## 註解

第八百條 縱令ヒ清算者ハ社員ノ代理人タリト雖モ之レカ爲メ清算者ノ爲ス一切ノ事ハ社員ヨリ前以テ確認シタルモノトノ結果ハ生セサル可シ故ニ清算者其清算事務ニ付テハ最モ注意ス可キ所ニシテ其所爲中若干ノモノニ付テハ社員ノ承認ヲ受ケサルコトアル可キナリ

然レモ右ニ關シテハ一ノ區別アリテ存スルモノニシテ即チ右ノ區別タル本條ニ規定セル所ナリ是ヲ以テ清算者社員ヨリ撰任ヲ受ケタル場合ニ該社員ヨリ爲スコトヲ認可セラレ又ハ法律上(前條)爲スコトヲ認可セラレタル一切ノ所爲ハ清算者ト約束ヲ結ヒタル第三ノ人ニ對シテハ常ニ其効力ヲ有ス可シ但シ此場合ニ於テ第三ノ人善意ナル可シトノ條件ヲ必要トス

然ルニ右ニ掲ケシ第三ノ人ニ對スルノ保護ヲ擴張シ餘リ廣キニ失ス可ラス即チ例ヘハ第三ノ人其善

意ニテ收受シタルモノハ不當ノ辨濟ト雖モ保存シ得ルモノト思テ可ラス何トナレハ爰ニテ法律カ不當ノ辨濟ニ關シタル普通規則ニ違フノ理ナキハ勿論尙ホ清算者第三ノ人ニ其負擔外ノ義務ヲ辨濟シタルハ其權限外ノコト爲セシモノト認メサル可ラサルモノナルヲ以テナリ又社員各自ノ部分勘定ノ如キ第三ノ人ニ關係ナキ所爲ニ至リテハ之レヲ証明シ、之レヲ抛擲シ、又ハ之レヲ改正シ得ルヤ明カナリト是レ他ナシ社員ハ第三ノ人ナラサルヲ以テナリ

蓋シ社員ノ承認セサル可キ種々ノ所爲中ニテ一ハ社員各自ノ部分勘定ノ如キ仕直シ得可キモノ又他ハ善意ノ第三ノ人ト爲シタル所爲ノ如キ仕直シ得可ラサルモノアル可シ即チ最初ノモノハ仕直ス可ク次キノモノハ仕直ス可ラサルモノニシテ最初ノ場合ニ於テ清算者ニ過失アルハ清算者ハ自己ノ費ヲ以テ清算ノ仕直ヲ爲ス可シ又次ノ場合ニ於テハ清算者其過失ヨリ生シタル損害ニ付キ社員ニ賠償ス可キナリ即チ右ノ場合ニ於テハ代理契約ノ規則ヲ適用シ其代理ノ謝金ヲ受ケテ爲シタルモノナ

ルト否ラサルトニ從ヒテ清算者ノ責或ハ嚴ニ或ハ緩ナル可キナリ

第八百一條 株式方法ヲ以テ民事會社ヲ組成セシキハ商事株式會社ノ規則ニ從テ其社ノ清算ヲ爲ス可シ

註解

第八百一條 資本ヲ株式ニ分チアル會社(資本ヲ主トシタル會社)ハ其民事上ノモノナルト商事上ノモノナルトヲ問ハス社員其人ノ信用ヲ主トシタル會社ヨリハ社員ノ數多カル可ク從テ終了ス可キ社業第

三ノ人ト規定ス可キ勘定許多ナルヲ以テ會社ノ清算上一層ノ錯雜ヲ來タス可シト雖モ右種ノ會社ニ於テ社員ト共ニスルノ勘定ハ却テ僅少ナリトス○然ルニ右種ノ會社ニ於テ支配人ノ勘定ヲ證明スルノ丁ニ至リテハ一層難カル可キナリ  
即チ前述ノ事タル商事會社ノ條例中ニ規載シ又ハ記載ス可キ或ル特別規則ヲ設定スル理由ト爲スニ足ル可ク且ツ其理由同一ナルヲ以テ商事會社ニ關スル右ノ特別規則ヲ以テ民事會社ニモ適用ス可キナリ

第八百二條 會社ノ解散後及ヒ清算後ニハ舊社員ノ各自又ハ其承權人ヨリ未分財產ノ分派ヲ請求スルヲ得可シ但シ第四十條ニ循ヒ社員該社ノ解散後ニ至テモ尙ホ未分ニ居ルヲ約シタルキハ格別ナリトス

註解

第八百二條 法意ニ因レハ分派トハ會社ヨリ生シタル諸般ノ關係ヲ閉止スル最終ノ行爲ナリ  
 嚴格ニ論スレハ清算前ニ分派ヲ爲シ得ルヲハ吾人ノ知ル所ナリト雖モ既ニ第七百九十六條ニ説明セ

ル如ク清算後ニ分派ヲ行フヲ以テ最良ノコトスレ抑モ分派ヲ請求スルニ付テハ決シテ社員ヲシテ之レヲ爲サシムルヲ強ユルモノニ非ス即チ分派ヲ請求スルハ社員ノ權能ニ在ルモノニシテ其權能ヲ用ユルト用キサルトハ其隨意ニ任セタルモノナリ然レモ總社員ヲシテ分派處分ヲ受諾セシムルカ爲メニハ唯其中ノ一名ヨリ分派ヲ求ムルヲ以テ足レリトス是レ共同財產ニ對シテ施ス可キ其他ノ處置トハ甚タ異ナル所ニシテ該處置ヲ施スカ爲メニハ或ハ多數決ヲ要シ或ハ全員一致ヲ要スルヲハ既ニ

吾人ノ揭示セシ所ナリ

此例外規則ヲ設ケタル理由ハ未分ヨリ生スル諸般ノ不都合タルニ外ナシ而シテ其不都合アルコトハ既ニ第四十條ニ於テ説明セシ所ナレハ敢テ茲ニ之レヲ再述スルハ其益ナカル可シ

會社ノ設立中ヲ以テ其解散後ニ比スルニ其設立間ニ於テハ右ノ不都合ノ存在セサルコトアリ又假令ヒ存在スルモ解散後ヨリハ少ナキコトアルナリ○其不都合ノ存セサルコトハ會社力無形人ナルコト言フ蓋シ此場合ニ於テハ會社獨リ其資本ノ所有者ニシ

テ未分ノコトアラサレハナリ○又其不都合ノ少ナキコトハ會社ノ<sup>ペルソナリテ</sup>人体質無キ時ニ社員ノ一致ト完全ノ

同意トヲ以テ圖利ノ目的ニ出テタル有期ノ未分アルコト云フ而シテ完全ノ同意ハ右ノ目的ヲ有セサル未分ニ於テ容易ニ求ムルコト難カルヘシ然レトモ第四十條ヲ見ルニ分派ノ爲メニ必要ナル賣却ヲ爲サントスルモ其機會ヲ失シタルニ因リ關係人ニ於テ其分派ヲ爲スニ害アリテ乃チ關係人ハ尙ホ或ル時期中未分ノ地位ニ居ルコトヲ約束スルコト得タリキ○此合意ヲ爲スニハ一般ノ規則ニ循ヒ



必ラス全員一致ヲ要トスルモノナリ故ニ本法ニハ  
敢テ之レヲ説明スルノ勞ヲ取ラス而シテ此合意ヲ  
爲スニハ「會社ノ解散後」タルヲ要ス是レ本法ノ希望  
スル所ナリ何トナレハ若シ此合意ヲ結社契約書中  
ニ爲セシカ若クハ會社ノ繼續中ニ爲セシニ於テハ  
充分ニ其原由ヲ知ラスシテ爲セシコアルヘケレハ  
ナリ然ルモハ社員ハ共同利益ヲ圖ランカ爲メニ檢  
束セラレサリシト雖モ亦其社員間ニ存在ス可キ  
善意上ニ錯誤ヲ爲スコアルベケレハナリ

第八百三條 關係各人ノ部分定メ方及ヒ其配當ノコ

ニ付キ各自一致セサルキハ此點ニ付キ相續財産及  
ヒ其他ノ共通財産分派ノ爲メ訴訟法ニ定メアル規  
則ヲ遵守ス可シ

註解

第八百三條 分派ヲ爲スニハ充分煩雜ナル行爲ヲ要  
ス即チ社員ノ員數丈又ハ少ナクモ最初ノ社員丈ニ  
配當ス可キ部分ヲ定メスンハアルヘカラス但シ既  
ニ死去シテ數多ノ相續人ヲ遺留セシ者ノ部分ヲ細  
分スルハ此限ニ在ラス、然ル後此種々ノ部分ヲ數多  
ノ有權人ニ配當ス可キト是ナリ

平等ニ配當部分ヲ定ムルノ困難ハ甚ク夥多ナルニ  
 非ス、若シ財産ノ性質上ヨリシテ平等ノ部分ヲ定ム  
 ルト難キハ則チ其財産ヲ賣却シテ獲タル所ノ代  
 價ヲ分派ス可シ加之社員等調和上ニ部分ヲ配當ス  
 ルト欲セサリシキハ抽籤ノ方法ヲ以テ之ヲ配當  
 スルトヲ得可シ

然レモ又或ハ特別合意アルニ依リ或ハ供資ノ不同  
 ナルニ依リテ各社員ノ權利均一ナラサルハ於テ  
 ハ會社ノ清算事務ハ前ノ如ク容易ノモノニアラサ  
 ルナリ即チ右ノ場合ニ於テハ各社員ノ權利ニ準

テ成ル可ク精密ニ其分配高ヲ定メサル可ラサルモ  
 ノニシテ爰ニテハ分配ヲ爲スニ抽籤方法ニ依ルト  
 能ハス直接ノ分配ヲ爲サル可ラサルナリ○蓋シ  
 各社員示談合ニテ即チ各社員共同シテ其社ノ清算  
 事務ヲ執ルノトハ實ニ希望シテ止マサル所ナリ然  
 レモ又前ノ如ク社員示談又ハ共同ヲ以テ清算ニ從  
 事スルノトモ離モ其適度ヲ失セサルヲ要ス○故ニ  
 前述ノ如ク社員一致シテ清算事務ニ從フ爲メニハ  
 右ニ關スル法律上ノ手續ヲ設定セサル可ラス  
 然ルニ己上ノ事タル權利ノ基礎即チ各社員ノ權利

確定ノトニ關スルモノニアラスシテ右權利確定ニ付テノ手續ニノミ關スルモノナルカ故ニ該手續ハ訴訟法ニ送り同法ニ於テ他ノ裁判所外ノ手續ト併セテ解説ス可シ

第八百四條 分派ニ因リ各社員ニ歸シタル物件上ノ權利ハ會社解散ノ日ニ溯リテ効力ヲ有シ而シテ未分中其他ノ社員ヨリ右物件ニ付キ第三ノ人ニ附與シタル權利ハ解除スルモノトス

註解

第八百四條 法律ハ己ニ第十五條ニ於テ適用シ同條

ニ於テ己ニ業ニ其目的及ヒ本源ヲ解説シタル所ノ普通原則ヲ爰ニ掲載セリ(第一冊第五十二葉及ヒ第五十三葉)

即チ吾人ハ爰ニ分派ハ新權利ヲ屬ス可キモノニアラスシテ舊權利ヲ認知ス可キモノナリトノコヲ説キ以テ本規則ノ解説ヲ繼續セントスルナリ○蓋シ前述ノ原則タル佛蘭西法典ニテハ其第八百八十三條ニ見ル所ノモノナリ然レモ嚴格ニ論シ且其所爲ノ性質上ヨリ論スレハ則チ分派ハ寧ロ新權利ヲ屬ス可キモノ又ハ新權利

ヲ移轉ス可キモノナルカ如シ何トナレハ分派ハ未  
分權ヲ止息セシムルモノニシテ各共同得分者ハ分  
派ノ時ヨリ始メテ自己ノ配當部分上ニ單獨ノ所有  
權ヲ受收スルモノナレハ右共同得分者ハ分派ヲ以  
テ他ノ共同得分者ヨリ自己ノ所屬ニ非サル部分ヲ  
得テ其己ニ自己ノ所屬タリシ部分上ニ收益權ノミ  
ヲ有スルモノ意ヲ轉シテ云ヘハ他ノ共同得分者ニ  
自己ノ所屬タリシ部分ヲ移轉スルモノト了解スル  
ヲ得可シ○蓋シ已上ノ事タル羅馬法ニ於テハ此外  
ノ理論ヲ認許セス又想像セサリシ程ニシテ實ニ當

然ノト云フ可シ且ツ佛蘭西舊法ノ基源モ亦之レ  
ト同一ノモノナリシ  
然ルニ實益アルカ爲メ即チ共同得分者ノ一人カ其  
共有物上ニ他ノ共同得分者ノ第三ノ人ニ供與セシ  
權利ノ故ヲ以テ受ク可キ奪取ノ危險ヲ避クル爲メ  
〔各共同得分者ハ（共同相續人）分派ヲ以テ已レニ歸シ  
タル物件ノミニ付キ直チニ相續シタルモノニシテ  
他ノ共同得分者ニ歸シタル部分ノ所有權ハ嘗テ有  
ヒサリシモノト見做ス可シト〕ノ假定ヲ認許シタリ  
シ即チ已上ノ假定タル相續事項ニ關シテ設定シタ

ルモノナリト雖<sup>レ</sup>他ノ分派ニモ適用シ得可キハ殆  
 ント佛蘭西法典第八百八十三條ノ法文上ノ條例ナ  
 リ(第千四百七十六條及ヒ第千八百七十二條)

蓋シ草案ノ本條ト佛蘭西法典第八百八十三條トノ  
 間ニハ法式上少差アリト雖<sup>レ</sup>其基礎ニ至リテハ毫  
 モ變換スル所ナシ○即チ佛法第八百八十三條ニ於  
 テハ各共同得分者ニ其部分ニ付テノミ獨有ノ權利  
 ナ<sup>ラ</sup>與<sup>ヘ</sup>他ノ共同得分者ノ部分ニ付テハ右ノ權利ヲ  
 拒<sup>ス</sup>絶<sup>ス</sup>シテ各共同得分者ノ爲メ二個ノ地位ヲ規定セ  
 リト雖<sup>レ</sup>モ草案ノ本條ニ於テハ只共同得分者中一人

ノ利益ヲ主トシテ之レカ地位ヲ規定シタルノミ是  
 ヲ以テ右得分者ハ會社ノ解散アリタル時ヨリ又ハ  
 未分權ノ始マリ他ノ社員共共同財産上ニ有効ナル  
 權利ヲ供與シ得サルノ時ヨリ自己ノ部分ニ付キ完  
 全ノ所有權ヲ有ス可キナリ○然レ<sup>レ</sup>ハ一人ノ共同得  
 分者ノ爲メ二重ノ利益アル已上ノ規則ハ他ノ共同  
 得分者ニモ適用ス可シ何トナレハ右ノ條例タル只  
 一人ノ得分者ノ爲メ定メタルモノニアラスシテ總  
 テノ共同得分者ノ爲メ設定セルモノナルヲ以テナ  
 リ

尙ホ本條ハ分派ハ權利ヲ認知ス可キモノナリ云々  
 トノ原則ニ付キテ直チニ結果ヲ推定シタルノ點ニ  
 付テモ佛法第八百八十三條ト異ナルモノニシテ分  
 派ニ依リテ獲得シタル權利ハ會社ノ解散アリタル  
 時即チ未分權ノ始マリタル時ニ溯リテ其効力ヲ生  
 ス可ク從テ會社解散ノ日即チ未分權ノ始マリタル  
 日ヨリ他ノ社員ノ供與シタル權利ノ解除即チ消滅  
 アル可キト是レナリ

本案ニ於テハ各共同得分者ノ權利ヲ會社解散ノ日  
 ニ溯ラシメタリ故ニ若シ會社民事上ノ人ヲ組成セ

ルモノナルキ(最モ屢アルノ場合)ハ別ニ困難アリテ  
 生スルコトナシ何トナレハ右種ノ會社ニ於テ未分權  
 ノ始マルハ解散ノ日ニ在リ此時ニ至ル迄會社ハ其  
 社ノ財産ノ所有者ニシテ會社ノ有効ニ供與シタル  
 權利ハ社員ニ對抗シ得可キモノナルヲ以テナリ  
 然レモ會社無形人ノ資格ヲ有セサルニ於テハ社員  
 ノ未分權ハ會社ノ成立ト共ニ始マルモノナレハ則  
 チ分派ノ効力ハ會社組成ノ當時ニ或ハ又少クトモ  
 分派ニ附スヘキ財産カ社員ノ手裏ニ歸シ會社資本  
 ノ一部ト爲リタル時ニ溯ル可シト主張スルコト得

可キナリ

然レモ本案ニハ會社ノ解散ナル一定ノ時期ヲ設ケ  
タリ○蓋シ會社ノ無形人ニ非ラス從テ其資本ヲ組  
成スル物件ノ社員ニ屬スルモ社員自己ノ權利者  
ノ爲メ之レニ物上權ヲ附スルコト能ハス適法ニ之レ  
ヲ讓渡シ又ハ之レヲ書入質トナスコト能ハス故ニ分  
派後ニ至リ自己ノ部分ニ付キ其共同社員ノ所爲ヨ  
リ生シタル奪取ヲ受クルノ恐レアルコトナシ故ニ本  
條ニハ法律カ分派ノ効ヲ既往ニ遡ラシメテ避ケン  
ト欲シタル弊害ヲ匡正スルニ他ノ方法ヲ以テ匡正

セラル可シ

第八百五條 共同分派者ハ分派ニ因リ各自ニ約セシ  
メタル權利上ニ第三ノ人ヨリ受クルコトアル可キ妨  
害及ヒ奪取ニ付キ互ニ擔保者ナリトス  
共同分派者中ノ一名無資力トナリタルモ其一名  
ノ負擔ス可キ賠償ノ部分ヲ其他ノ共同分派者及ヒ  
被擔保者ニ於テ更ニ分擔ス可シ

註解

第八百五條 前條ニ於テハ第三ノ人ヲシテ奪取ヲ爲  
スコヲ得サラシメンカ爲メ豫防ヲ爲シタルニ本條

〇至リ奪取擔保ノ事ヲ記スルヲ見テ或ハ訝カル者  
 アラソ〇然レモ其前後撞着スルコトナキヲ解スル敢  
 テ難キニ非ス蓋シ其社員ニ擔保ヲ爲ス可キ奪取ハ  
 自餘ノ社員ヨリ附與シタル權利ヨリ生スルコトナカ  
 ル可シ何トナレハ自餘ノ社員ノ附與シタル權利ハ  
 第三ノ人ニ對シ解除セサル可ク其第三ノ人ヨリ却  
 テ權利ヲ附與セラレタル物件ノ之レヲ附與シタル  
 社員ノ分ケ前中ニ包含セサルモハ分派ノ爲メニ奪  
 取ヲ受ク可ケレハナリ  
 本條豫見スル所ノ奪取ハ社員ノ權利ヨリ前ニ發生

〇且ツ之レニ勝レル權利ヨリ生スルモノナリ是レ  
 社員間ノ未分物タラスシテ第三ノ人ニ屬シ又ハ未  
 分ノ起ラサル前ニ在テ既ニ物上權ヲ附着シタリシ  
 物權ヲ分派中ニ包含シタルモ於テ見ル所ナリ  
 又或ハ社員ノ一名ニ於テ此物上權ヲ附與シタルモ  
 前條ニ定メタル解除ヲ受ケサルコト之レアル可シ例  
 へハ動産權ニ關スルモ第三ノ人其善意ノ占有者ト  
 リシキノ如シ此際ニ於テハ第三ノ人奪取ヲ受ク可  
 ラサルカ故ニ此第三ノ人ニ於テ共同分派者ヲ剝奪  
 ス可シ



本條中「前條ニ取除キタル以外ノ原因」ニ係ルコトヲ記載シタルハ第八百四條及ヒ第八百五條ノ二條ヲシテ外顯上タリトモ牴觸アラサラシメシカ爲メナリ」第四百十五條第二項ニ於テ奪取擔保ニ二個ノ目的アルコトヲ記載セリ即チ讓受人ノ被フリタル妨害及ヒ被フルノ恐レアル奪取ニ對シ裁判所ニ於テ其辨護ヲ爲ス可キ事及ヒ奪取ヲ防止スルコト能ハサルハ損害賠償ヲ爲ス可キ事はレナリ

右義務中共第一ハ不可分ニシテ各共同分派者其全部ヲ擔當ス可キモノナリ何トナレハ人ヲ辨護スル

ニ一部分ノミヲ以テスルコト能ハサルハナリ」是レ法律ノ格言タル所ナリ然レモ第二ノ義務ニ至テハ金額ヲ以テ目的トスルカ故ニ可分タルモノトス抑モ各共同分派者其部分ニ付テノミ訴ヲ被フルヲ受クルヲ原則トスルト雖モ自餘ノ者無資力ナルハ其部分ニ付キ附從トシテ訴ヘラル、ヲ妨ケス○蓋シ若シ擔保ノ目的擔保者ノ無資力ニ在ラサルハ擔保ノ効空シカル可シ○擔保者ハ互ニ其無資力ヲ相擔保スルモノナリ○然レモ被擔保者モ亦奪取ノ損害賠償ノ一部ト自餘ノ者ノ無資力ノ一部ト

ヲ自カラ擔當ス可シ○否ラサレハ被擔保者ハ奪取ヲ被フルヲ以テ却テ其利益ヲ得可シ

第八百六條 分派ハ丁年者間ニ爲シタルモノニシテ且ツ其分派ハ動産ノ有價物ヲ目的トシタルニ過キサルキト雖モ未分財産ニ付キ受ク可キ部分ノ四分一以上其分派ニ因リ損失ヲ蒙リタル者ハ之レヲ廢棄スルヲ得可シ  
其損失ヲ證スル爲メニハ賣買ノ章第七百三十五條ニ制定シタル法式ヲ遵守ス可シ

註解

第八百六條 損失ノ概シテ合意取消即チ廢棄ノ原因

タラサルコトハ人ノ知ル所ナリ(第三百二十六條末項)

○此原則タル辨明セシ所ニシテ其例外ノ辨明モ亦

タ豫メ之ヲ開陳セリ(人權之部第三百二十六條註第

四十九號及第五百六十六條註第六百四十六號)

第一ノ例外ハ其區域最モ廣クシテ未丁年者ノ爲メ

ニ設ケタルモノナリ即チ未丁年者ハ金額ヲ以テ評

定スルヲ得ヘキ部分ノ損失ヲ被フリ且ツ其所爲毫

モ特別ノ法式ニ從ハサリシトハ常ニ其約束又ハ其

讓與ヲ取消スヲ得ルモノトス(第五百七十條)若シ

其法式ヲ履行スルヲ怠リタルハ此一事ニ據リ損失アラサルモ仍ホ其所爲ヲ取消スコトヲ得ルモノナリ又若シ其法式ヲ行フタルハ損失アルモ其所爲ヲ取消スコトヲ得ス(人權之部第五百六十九條及ヒ第五百七十條註解)

丁年者ハ之レニ反シ損失ノ爲メ廢棄ヲ行フコトヲ准サレサルモノナリ但シ殆ント同等ナル價額ノ交換アルヲ要スル所ノ或ル契約ニ關スルハ此限ニ在ラストス佛蘭西ニ於テハ丁年者損失ヲ被フリタルカ爲メ廢棄スルコトヲ得ヘキ契約二個ニ過キス不動

產賣買及ヒ未分財產ノ分派即チ是レナリ  
 本案ニモ亦タ右ノ場合ノ外之ヲ増加スヘキノ理由アルコトナク又之ヲ減少スヘキノ理モアラサルナリ  
 不動産賣買ニ付テハ較々疑ヲ容ルヘキモノナリシカ  
 遂ニ其廢棄ヲ准許シ加之ス不動産ノ實價ノ二分一即チ十二分ノ六ヲ以テ充分ナル損失ノ高ト定メ  
 十二分ノ七トセス以テ少ク之ヲ容易ニセリ(第七百三十三條ヲ看ル可シ)

分派ニ關スル損失ノ爲メ廢棄ヲ准許スルコトニ付テハ更テニ躊躇スルニ及ハサルモノナリ何ントナレ

ハ共同分派者分派前ノ關係タル一層嚴ニ公平ヲ旨トセサル可カラサルモノナレハナリ○是ヲ以テ其損失ノ高モ較々少シトス即チ其損失ハ正當ニ被害社員ノ所得トナルヘキ部分ノ四分一タルヲ以テ足レリトス○且ツ其損失ノ動産ニ係ルト不動産ニ係ルトヲ區別セス○是レ本條ニ賣買トノ區別ヲ詳ラカニセンカ爲メ特ニ記載スル所ナリ

本條ハ損失ヲ證明スルカ爲メ定メタル程式ヲ賣買ノ章ニ讓ル(第七百三十五條)其本章ニ於ケルト同一ナルハ理ノ當然ナリ○然レモ關係人ト同數ノ鑑定人ヲ命スルヲナク唯タ廢棄訴權ノ被告人ニ於テ一名ノ鑑定人ヲ命スヘキノミ  
 訴權ノ期限ニ至テハ不動産ノ賣買ニ於ケルカ如ク二年ニ減縮セラレサルヲ以テ(第七百三十四條)五年タルヘシ(第五百六十六條第二項)

第十六章 偶生契約

第八百七條 偶生ノ契約トハ一個ノ合意ニシテ結約者双方又ハ一方ノ利益若クハ損失ニ關スル其合意ノ効力ノ全部又ハ一部カ將來ノ不確定ナル事故ニ因リテ定マルモノヲ云フナリ

註解

第八百七條 佛法典ニ於テハ諸種ノ有名契約ノ列置ヲシテ據トセシメタル整頓セル順序ヲ見ルコト難シトス就中偶生契約ノ如キハ附託契約ノ後名代契約ノ前ニ之レヲ置ケリ然レモ此契約ハ右二個ノ前ニ

置クカ又ハ其後ニ置ク可キモノナリ  
 本案ノ之レニ反シテ偶生契約ヲ附託及ヒ名代契約  
 前ニ置キタルハ道理ナキニ非ラサルナリ嘗テ本案  
 ニハ先ツ物上權ト對人權トヲ併セテ附與スル所ノ  
 一切ノ契約ヲ定メ次テ對人權即チ債主權ノミヲ附  
 與スル所ノ契約ヲ定ムルヲ以テ原則ト爲スヲ述  
 ヘタリ○而シテ偶生契約殊ニ畢生間ノ年金設定ハ  
 物上權ト對人權トヲ併セテ附與スル所ノ部類ニ屬  
 ス

既ニ第三百二十二條ニ於テ「成立又ハ効力ノ偶然ニ

關スル事故ニ附從スル」契約アルヲ開陳シタリ○  
 偶生ニ非ラサル契約ハ佛法ニ之レヲ稱シテ互易ト  
 云フ(第千百四條)

本草案ニハ之レニ堅固契約ノ稱ヲ附シタリ此詞ノ  
 他ニ優ルモノト認メシ所以ハ嘗テ之レヲ辨明セリ

(第三百二十二條註解)

本條ニ掲ケタル偶生契約ノ定義ハ第三百二十二條  
 ノ定義ニ比スレハ較々完全ナリトス然レモ敢テ之  
 レト牴觸スルモノニ非ス而シテ此點ニ付テハ佛法  
 典ノ如ク二个ノ定義牴觸スルヨリ生スル所ノ困難

アルコナシ蓋シ佛法第千百四條ニハ偶然運賦ノ長  
 否ヲ問ハズ「双方」ノ爲メニ存在スルヲ要スルカ如ク  
 ナルニ第千九百六十四條ニハ利得又ハ損失ノ運賦  
 カ結約者ノ一方ニ在ルト双方ニ在ルトヲ區別セス  
 草案ハ單ニ一タヒ此論點ニ付キ言フ所アルノミニ  
 シテ而シテ佛法第千九百六十四條ノ論決ヲ採用ス  
 ○實ニ或ル場合ニ於テハ結約者一方ノ爲メニノミ  
 契約ノ効不確定ナリ列ヘハ<sup>ア。定。料。保。險。ノ。如。キ。保。險。者</sup>  
 ハ每歲保險料ヲ受取り災害ヲ負擔セサルノ良運ア  
 リ又反對ノ運賦ヲ被フルコアルモ保險依頼人ハ毫

モ不幸ノ運賦ヲ被フルコナク又幸運ヲ望ムコ能ハ  
 ス其辨濟シ又ハ負擔ス可キ定料ハ豫定シタル災害  
 ノ生シタルト否トニ從リ増加スルコ能ハス又減少  
 スルコ能ハサルナリ○彼ノ相互ノ保險ニ至テハ双  
 方同時ニ保險人トナリ又依頼人トナルカ故ニ之レ  
 ナ取除キタリ(第三節ヲ看ル可シ)

佛法典ニ於テハ條件ノ定義ヲ下スノ法條ニアツテ  
 其一(第千百六十八條)ハ合意ノ關スル事故「將來」ニシ  
 テ且ツ不確定ナルヲ要ストシ其一(第千百八十一條)  
 ハ其「不確定ナル」ノミヲ以テ足レリトシ詳言スレハ

現ニ到着シタルモ、双方ノ者ノ知ラサルヲ以テ足レ  
 リトスルヨリ前後撞着ヲ生シ爲メニ前段ニ言フ所  
 ト同一ノ困難ヲ來シタリ

本案ハ第一ノ論決ヲ採用セリ(第四百二十八條)其理  
 由ハ嘗テ之レヲ開陳シタリ(同條註解)

偶生契約ニ係ルハ不確定ノ事故亦タ將<sup>○</sup>來<sup>○</sup>ニ在ル  
 ヲ要スルカ將タ不確定ノミヲ以テ足レリトスルカニ  
 佛蘭西法典ハ前述ノ二箇條ニ於テ不確定ノヲ要  
 スルニ過キス(第一千百四條及ヒ第一千九百四條)吾人亦  
 同一ノヲ加ヘテ事故ノ未來ナルヲ要セリ

實際結約者ノ損失又ハ利益ノ關スル事故ハ假令ヒ  
 法律上要セサルモ雖モ殆ント自カラ未來ノヲニ  
 屬ス可シ例ヘハ博<sup>シ</sup>戲<sup>モ</sup>ノ結果、定マリタル時期ニ於ケ  
 ル人ノ生存、保險シタル災害(火災若クハ難船)等ノ如  
 シ然レトモ若シ法律上契約ノ果効ヲ以テ既ニ成就  
 シタル事故ニ關セシムルヲ禁セサリシモハ時ト  
 シテハ其事故既ニ成就シタルモノナルヲアル可シ  
 故ニ法律上之レヲ禁止スルヲ要ス何トナレハ合意  
 ノ結果既ニ成就シタル事故ニ關スルモハ其合意ハ  
 眞實ノ賭事ナレハナリ而シテ賭事ハ原則上法律ノ



果効ヲ失ヒ法延へ訴出スルヲ得サルモノニシテ又假令ヒ例外ニ於テ有効ナルモ賭事ノ關スル事故ハ尙ホ未來ナルヲ要ス例へハ馬ノ所有者二名又ハ白樂二名ノ間ニ競馬ノ結果ヲ賭シタルカ如シ又保險ニ付テ論スレハ火災又ハ海上危難ノ經過シテ人其結局ヲ知ラサルニ其災害ニ對スル保險ヲ許ス可カラス何トナレハ其災害生セシキハ毫モ有利ノ運命ナカル可ク尙ホ其災害生セサリシキハ毫モ損毛アルヲナケレハ其契約ハ決シテ偶事「アレア」ニ關セス即チ偶生ノモノニ非ラサレハナリ

是ヲ以テ其事故ハ未來ノモノニシテ又不確定ノモノタルヲ要トス

第八百八條 偶生ノ契約ニ其性質偶生ノモノト結約者ノ意思ニ因ル偶生ノモノトノ二種アリ

博戲、賭事、畢生間ノ年金又ハ其他畢生間ノ權利設定、陸海ノ保險及ヒ海上ノ利益見込即チ海上危險擔當貸與ハ總テ其性質偶生ノ契約ナリ  
其他ノ契約ニシテ其成立又ハ効力カ停止若クハ解除ノ未必條件ニ從フモノハ結約者ノ意思ニ因ル偶生ノ契約ナリトス

註解

第八百八條 性質上双務ノ契約ノ結約者ニ於テ一箇ノ條件ヲ加フルニ非サレハ双務トナラサル契約トノ間ニ法律爲ス所ノ區別ハ唯理論上ノ利益アルニ過キス然レモ該區別ハ偶生契約ノ列記ヲ爲スコトノ序デヲ與フルモノニシテ其中ノ三箇ハ茲ニ數節ニ分チテ説明シ他ノ二箇ハ海上商法ニ讓テ其説明ヲ爲ス可シ(第八百九條)

各三箇ノ偶生契約ノ緒論ハ後文説述ス可キヲ以テ本條ニ之レヲ掲クルハ其益ナカル可シ○然リト雖

モ此三箇ノ契約ヲ以テ概ネ有償ノ名義ニ於ケル双務ノモノト見做スノ誤リナルコトヲ注視ス可シ最モ是レ往々アル可キノコトナレトモ其性質ニ欠ク可カラサルモノニモ又之レニ密着シタルモノニモアラサルナリ○例ヘハ例外ニ非サレハ必ス義務ヲ負フモノニ非サル博戯又ハ賭事ニ關シ結約者ノ一方ノ者勝利ヲ得タルモハ何等ノ約權ヲモ附セス唯タ失敗シタルモハ自カラ義務ヲ負フコトアル可シ又無償ノ名義ヲ以テ畢生間ノ年金ヲ設定スルコトアル可シ故ニ此場合ニ於ケル年金ハ双務契約ノ結果ニ非

サルナリ

保險契約ノ如キハ有償ノ契約タルヲ言テ俟タスシテ明カナリ然レモ終始双務ノ性質アルモノニ非ス蓋シ保險ヲ爲ス者災害ノ賠償ヲ拂フ可シト約束スルモニ保險依頼人ヨリ毎年ノ保險料ヲ拂込ムキハ則チ片務ノ契約ナリ

又海上ノ利益見込ニ關スル貸與ハ利足又ハ其他ノ利益ヲ生スルモノトシテ有償名義ニ於ケル契約ナルヲ明カナリ然レモ該契約ハ諸般ノ貸借契約ノ如ク片務ノモノニシテ唯借主ノミ義務ヲ負フニ過キ

ス何トナレハ該契約ハ物ノ交付ニ因テ始メテ行ハル、モノナレハ則チ實行契約ニ外ナケレハナリ(第三百二十條第三項ヲ看ヨ)

### 第八百九條 海上保險及ヒ海上ノ利益見込貸與ハ海上商業ニ關スル法律ノ支配ヲ受ク可キモノトス

註解

第八百九條 本條ハ商法ニ讓リテ説明セシメタルニ過キサレハ茲ニハ深ク論究スルニ及ハサルナリ海上保險ハ船舶全部又ハ一部其附屬品若クハ其積荷ニ適用ス

實際行ハル、所ノ保險ハ此等ノモノヲ以テ始メト  
 ス蓋シ海上ノ災害ハ往々生スルモノニシテ宜シク  
 航海者ノ發明心ヲ振起セスンハアル可ラス○然レ  
 凡希臘及ヒ羅馬ノ舊法ニハ保險ノコトヲ記載セス歐  
 洲ニ於テモ中興ヨリシテ此事ヲ設ケタルニ過キス  
 海上ノ災害ヲ目的トセサル保險ニシテ火災其他天  
 災ニ對スルモノハ「陸上」保險ト稱シ保險依頼人其近  
 親ノ爲メニ自己ノ死去ス可キ時期ニ付キ自己ノ生  
 命ノ利益ヲ以テ金錢ト相殺セシメント欲スル契約  
 ノ如キハ之レヲ「生命」ニ關スル保險契約ト云フ○又

一層簡單ニ云ヘハ之レヲ「死去ニ對スル」保險ト稱ス  
 可シ、此ノ如ク生命保險ト稱シタルモノ之レカ爲メ保  
 險依頼人ノ爲メ其死去ノ危険ヲ減少セサル可キコ  
 明カナリ然レトモ該保險ハ利益上ノ結果ヲ和ラケ  
 若クハ之レヲシテ存セシメサルニ至ル可シ又火災  
 其他諸般ノ天災ノ保險モ此等ノ災害ヲ防止シ又ハ  
 減少スルニ非スシテ之レカ爲メ其果效ヲ改正シ又  
 ハ賠補スルモノナリ  
 航海中ノ死去ニ對スル保險ハ海上保險ノ規則ニ服  
 従ス可キモノナルヤ將タ陸上保險ノ規則ニ従フ可

キモノナルヤハ第三節ニ至リテ説明ス可キ論點ナ  
リ

航海中ノ船舶若クハ碇泊在港中ノ船舶ノ火災保險  
ニ付テハ假令ヒ火災カ航海ノ結果ニアラスシテ尋  
常ノ懈怠ニ出テタルト雖モ亦海上ノ法律ヲ以テ  
之レカ處置ヲ下スモノトス

海上利益見込貸與ニ付テハ其尋常ノ目的海路ニ因  
リテ概テ遠方ニ運輸ス可キ商品(又ハ積荷)ノ買得テ  
借主ニ容易ナラシムルニ在リ而シテ若シ其商品滅盡  
スルトハ貸主ハ元金ハ勿論其他ノ利益ヲモ受ケル

一ナシ若シ又タ右ノ商品無事ニ着港シタルトキハ  
貸主ハ元金ヲ受取ノミナラス尙ホ保險料トシテ海  
上ノ利益ヲモ受取ル可ク若シ又タ積荷ノ一部分滅  
盡シタルトハ獨リ其殘存物ヲ以テ貸主ニ負擔シタ  
ル金額ノ辨濟ニ充ツ可キヲ約束スルモノナリ

### 第一款 博戲及ヒ賭事

第八百十條 博戲ノ義務執行ニ付テハ其性質博戲者  
ノ勇氣、力量、巧技ヲ發達ス可キ體軀ノ運動ニ關スル  
モノニ非レハ裁判所へ訴ヲ爲スヲ許サ、ルモノ  
トス

賭事ニ原由スル訴權ハ右ノ運動ニ關係ヲ有スル人ノ利益ニ於ケルカ若クハ又農工商ノ事ニ關スル事業ニシテ賭者自ラ之レニ直接ノ關係ヲ有スル其事業ノ繁榮ニ係ルキニ非サレハ亦允許セサルモノトス

若シ又右ノ博戯又ハ賭事ニ付キ約シタル金額又ハ價額ハ其事情ニ照シテ過分ノモノナルキハ裁判所ニ於テ其請求額ヲ減少スルヲ得スシテ其請求ヲ全ク棄却ス可シ

註解

第八百十條 爰ニ草案ノ佛蘭西法典ト異ナル所ハ其基礎ニアラスシテ寧ロ其書方ニアルモノニシテ佛蘭西法典ハ其第一千九百六十五條ニ於テ先ツ原則上ニテハ博戯又ハ賭事ノ義務執行ニ付テハ訴權ヲ拒絶シ次テ例外ヲ置キ或ル博戯又ハ賭事ノ義務執行ニ關シテ訴權ヲ許與シタリト雖モ草案ニテハ先ツ如何ナル場合ニ於テ博戯又ハ賭事ノ義務執行ニ關シテ訴權ヲ與フルヤヲ説キテ次テ之レヲ拒絶ス可キ他ノ場合ニ説キ及ヘリ○蓋シ右ノ如ク草案及ヒ佛法ニ於テ其説ク所ニ前後ノ別アリト雖モ基礎上

其結果ニ毫モ異ナル所ナキナリ○蓋シ草案ニ於テ規則ト例外ヲ叙述スルニ此ノ如ク順序ヲ異ニセシノ理由ハ法律カ有名契約即チ義務ヲ生スルモノ非サレハ契約ニ關スル條例中ニ入ラサル契約ノ理論ヲ説クニ右契約カ訴權ヲ生セサルノ場合ヲ以テ始メタルハ實ニ奇怪ナリトノ丁ニ在ルモノニシテ是ノ如キハ猶ホ右ノ契約ハ制禁スル所ニシテ何等ノ効力ヲモ生セスト云フニ外ナラサルナリ○夫レ然リ是ヲ以テ若シ博戯又ハ賭事ニシテ義務ヲ生シ、民事上ノ訴權ヲ有スルノ場合アレハ縱令ヒ其場合ハ

例外ノモノナリトモ先ツ之レヲ掲ケ而シテ後チ其義務ヲ生セサル場合ニ及フ可キモノトス何トナレハ博戯賭事ニシテ法律ノ定メタル契約中ニ存スルハ至ク右例外ノ場合アルニ依ルモノナレハナリ蓋シ佛蘭西法典ハ其第一千九百六十五條ニ於テ其訴權ヲ與フル博戯中若干ノモノヲ例證トシテ列記セリト雖モ右ノ列記タル定限セルモノニアラサルカ故ニ之レニ游泳、相撲、体操ヲ加フルニ躊躇ス可ラス○即チ右ニ關シテ必要トスル所ハ是等ノ博戯ハ其目的博戯者ノ力量及ヒ巧技ヲ發達スルニ在ル可キ

一是レナリ故ニ吾人ハ爰ニ首トシテ〔勇氣〕云々ノ語ヲ置ケリ是レ他ナシ爰ニテ右等ノ運動ニ關係スル者ノ主タル目的ハ勇氣ヲ鼓舞スルニ在リ又立法者ノ宗ム可キ結果モ同一ノ一ニ在ルモノナルヲ以テナリ蓋シ力量巧技ハ勇氣ヲ鼓舞スルニ干リテ大ニ力アル可シ何トナレハ右等ノ事タル人ヲシテ自信ノ念ヲ深カラシメ從テ危險ヲ凌クニ容易ナラシム可ケレハナリ○斯ノ如ク説キタリトテ體軀ノ運動ニ強且ツ巧ニシテ最モ勇氣アル者ノ爲メニ粗暴ニ陷ルヲ恐ル可ラス何トナレハ體軀ノ運動ニ堪ユル

尤モ強ク最モ巧ミナル者ハ粗暴ニシテ且ツ鬪爭ヲ嗜ムヨリハ寧ロ其反對ナル可キハ經驗上之レヲ證スルニ足ルモノナレハナリ然レハ學問上ノ事ニ係リ又ハ繁雜ナル事ニ係ルカ如キ精神ノ發達ヲ主トシタル博戯ハ訴權ノ特許ヲ得ルヲナシ是レ他ナシ右ニ關シテハ前ノ如ク最強ノ理由アルモノニアラスシテ佛蘭西ニ於テ將棋ニ巧手ナル博戯者日本ニ於テ碁ニ巧手ナル博戯者カ只其技ノミヲ以テ軍隊ヲ指揮シテ戰陣ノ間ニ勝ヲ制スルヲ確實ナルモノニアラサルヲ以テナリ



然ルニ例ヘハ圖書音樂ノ如キ藝術又ハ詩文ノ如キ文學又ハ有形又ハ無形ニ關スル理學ノ競争ヲ以テ訴權ヲ有セサル博戯ト見做ス可ラス即チ此ノ如キ精神ノ演習ニ係ルモノハ博戯ニアラスシテ有効ニ供與シ又ハ義務トシテ約シタル公私賞譽ノ目的タルヲ得可キナリ○法律ハ賭事ヲ以テ博戯ト同視シ賭事ノ義務執行ニ關シテ訴權ヲ與フルハ博戯ト同一ノ場合ニ於テセリ

即チ賭事トハ一個ノ合意ニシテ之レニ依リテ双方ノ者互ヒニ契約ノ當時ハ尙ホ不確實ナル或ル事件又ハ事故カ双方ノ持説又ハ希望ノ如ク完充スルト否トニ從ヒ利益ヲ提供ス可キヲ約スルモノヲ云フナリ○例ヘハ爰ニ甲乙ノ二人アリ某日又ハ一層早ク某號汽船カ桑港ヨリ横濱ニ到港スレハ乙者ヨリ甲者ニ百圓ヲ拂フ可シ又該船ノ着港一層遲延スルニ於テハ甲者ヨリ乙者ニ同シク百金ヲ拂フ可シト合意シタリトセン乎○右ノ如キ賭事ハ一般ニ法律上ノ制裁ヲ與ヘサル賭事中ノ一ニ列ス可キモノニシテ其義務執行ノ爲メ裁判所ヘノ出訴ヲ許サ、

ルナリ○然ルニ甲者乙者ハ船匠又ハ航海者ニシテ  
造船術又ハ航海術ニ改良ヲ加フルノ目的ヲ以テ競  
争ヲ爲シ金圓ヲ賭シタリトセン乎右ノ場合ニ於テ  
賭事ハ造船術又ハ航海術ノ進歩ヲ勸奨スルモノナ  
ルカ故ニ有効タル可シ○又爰ニ牧者アリ其鞠育セ  
シ馬匹ノ競走ニ付キ賭事ヲ爲シタリトセンニ右ノ  
賭事モ亦有効タル可シ是レ他ナシ右ノ如キ賭事ハ  
馬種ノ改良テ勸奨ス可キモノナルヲ以テナリ○然  
レモ競馬縦覽者又ハ好馬者ニ於テ馬匹ノ勝敗ニ關  
シテ賭事シタリトセン乎該賭事ハ固ヨリ無効タル

可シ何トナレハ牧者毫モ該賭事ヲ利スル所ナケレ  
ハ別ニ之レヲ勸奨スル所アラサルヲ以テナリ  
又勝馬ニ約シタル賞金ニ至リテハ其馬ノ牧者ヲ獎  
勵スル所アルモノナルヲ以テ固ヨリ有効タル可シ  
然レモ右ノ賞金タル絶テ賭事ノ性質アルモノニア  
ラスシテ未必條件ヲ以テシタル贈與タル可キナリ  
蓋シ己上ニ叙述セシ例証及ヒ區別ヲ以テ賭事ニ關  
スル最終項ノ條例ヲ解釋スルニ足ル可シ○法律ノ  
爰ニ首トシテ有効ナリト説キタル賭事即チ賭者ノ  
力量又ハ巧技ヲ發達ス可キノ遊戯又ハ運動ニ關シ

タル賭事ハ其運動ニ直接ノ關係ヲ有セシ者ノ間ニ  
存シ而シテ賭事ニテ得ルモノハ右ノ遊戲又ハ運動  
ヨリ生シタル直接ノ利益タルニ過キサルナリ  
爰ニ法律ハ佛蘭西法典ニ採リタル一ノ條例ヲ以テ  
本條ヲ終了セリ而シテ其條例タル最初一見スル所  
ニテハ實ニ至難ノモノナルカ如シト雖此之レヲ說  
明スル敢テ難キニアラサルナリ  
即チ裁判所ハ博戯又ハ賭事ノ利益トシテ約シタル  
價額ヲ減少スルヲ得ス故ニ若シ裁判所ニ於テ右ノ  
金額ヲ過分ト見ルルハ全然請求ヲ棄却ス可シトノ

一是ナリ  
即チ已上ノ論決タル右ノ如キ約束ニ於テ巧ニ双方  
ノ者ノ利益ヲ保護セルモノナリ○若シ裁判所ニ於  
テ金額ヲ減少シ得ルモノトセン乎双方ノ者ハ裁判  
者カ約束ヲ保持スルカ又ハ約束ノ全部ヲ保持セサ  
ルモ常ニ其一部ヲ存立スルモノナルヲ期シテ過  
當ノ約束ヲ爲シ以テ万一ヲ僥倖スルニ至ル可シ何  
トナレハ前ノ如ク請求ノ全部ヲ棄却セス其幾分ヲ  
減スルニ止マルルハ双方ノ者ハ何等ノ損害ヲ受ク  
ルコトナケレハ過當ノ金額ヲ約シテ非常ノ利益ヲ計

ルヲアル可シト雖モ若シ請求ノ全部ヲ棄却スレハ  
 双方ノ者請求棄却ノ恐アルカ故ニ常ニ勉メテ金額  
 節減ノコトニ注意シ敢テ過當ノ要求ヲ爲サ、ル可ケ  
 レハナリ

尤モ裁判所ハ〔其事實〕殊ニ契約者相互ノ資産ニ注意  
 シ其資産最モ少キモノヲ標準トシテ基礎ヲ定ム可  
 シ但シ利益損失共ニ等シキモノナル時ニ限ル可シ  
 蓋シ右ノ事項ニ關シテ學者ノ概テ不問ニ附スル左  
 ノ論題ヲ査定セサル可ラス

勝者ノ利益ハ双方ノ者各自ノ爲メ同一ナラサル可

ラサルヤ又ハ双方ノ者ノ中一人勝テハ若干金ヲ得  
 敗ルレハ若干金ヲ與フ可キヲ合意シ得可キヤ(勝  
 敗ニ依リテ賭金ニ多少アルナリ)

即チ吾人ハ前ノ如ク賭金ニ多少アルヲ禁スルコトニ  
 付キ至當ノ理由ヲ見ス例ヘハ力量又ハ巧技ノ發達  
 ニ關スル博戯ニ於テ競争者中一方ノ力量巧技ハ他  
 ノ者ニ比シテ著シク優レルモノニシテ勝ヲ得ルノ  
 幸運最モ多キカ如キヲアル可シ(勝ヲ得ルコト全ク確  
 實ナラサルハ勿論ナリ何トナレハ若シ勝ツコト確實  
 ナルニ於テハ運動ニ關シタル偶生ノコト毫モ之レナ

ケレハナリ)夫レ然リ是ヲ以テ右様ノ場合ニ於テハ  
 強者ノ未必利益ハ弱者ノ未必利益ヨリ少ナルヲハ  
 實ニ正當ニシテ適理ナル可シ

然レモ若シ競争者ノ一人ノミ其賭事ニ勝チタル場  
 合ニ之レヨリ生スル利益ニ權利ヲ有スルハ如何  
 ニ論決ス可キモノナルヤ○吾人ハ尙ホ右ノ契約ハ  
 偶生トシテ有効ナルモノト思惟スルナリ蓋シ右ノ  
 場合タル實ニ双務契約ニアラス又有價契約ニモア  
 ラサレハ已ニ契約篇ノ初メニ説キタル所コシテ即  
 チ強者ノ未必條件ヲ以テ爲シタル贈與即チ未必條

件ヲ以テ弱者ニ與ヘタル賞金ノ一種タル可キナリ

第八百十一條 前條ニ規定シタル場合ノ外總テ博戲  
 又ハ賭事ハ毫モ民事上又ハ自然上ノ義務ヲ生セス  
 且ツ右ニ關シテ爲シタル認知更改又ハ保證ハ無効  
 ニシテ其効力ヲ有セサルモノトス  
 然レモ能力者ヨリ右ノ義務ニ憑據シテ任意ニ辨濟  
 シタルモノハ取戻スコトヲ認許セス但シ勝者ノ方ニ  
 詐欺若クハ猾計アリタルハ格別ナリトス

## 註解

第八百十一條 前條ニ規定セシ博戲及ヒ賭事ノ外ノ

博戯及ヒ賭事ハ法律上認可セサル所ニシテ民事上ノ義務ヲ生スルモノニアラサレハ從テ裁判所ヘノ訴權ヲ有スルモノコアラサルナリ

爰ニ草案ニ於テハ佛法及ヒ其他ノ法律コテ疑ヲ存セル一ノ論題ヲ決シ博戯賭事ハ自然上ノ義務ト雖モ生セサルコトヲ附加セリ○蓋シ本論題タル前已ニ見タル所ニシテ其論決モ亦已ニ第二冊ノ註解中ニ附シタル所ナリ(二百七十葉、八百十八葉、八百二十四葉及ヒ八百六十五葉)

抑モ賭博及ヒ賭事ノ負債タル前條ノ例外ノ場合ニ

係ラサルキハ正當ノ原因ナク不義ノ原因ヲ有スルモノナリ何ントナレハ他人ノ財産ヲ以テ已レノ富ヲ得而シテ之ニ利益ヲ供スルコトナク又ハ其他人ニ於テ之ニ贈與ヲ爲スノ意欲ナキハ即チ公ケノ秩序及ヒ國ノ經濟上害アルノミナラス亦併セテ道德ニ反スルモノナレハナリ○然ルニ准許セサル賭博ニ付テハ必ス之レアルヲ見ル○而メ利益ヲ得ル好運ノ損失ヲ被フル危險ト相ヒ償フト信スルハ謬見ナリト謂フ可キナリ是レ利益ニ原因アルヲ證ス可キモ其正當ナルヲ證セサルナリ而シテ賭博ノ經濟上ニ害

アルノ性質ヲ爲スモノハ賭者一人ノ利益ハ方サニ  
 他ノ一人ノ同等ナル損失ニ應スルト是レナリ然ル  
 ニ他ノ有償契約ニ付テハ双方ノ者多少授與スル所  
 アルモ亦爲メニ領收スル所アルヲ以テ双方ノ者共  
 ニ利益ヲ得ルモノト看做ス誠實ニシテ且ツ巧ニ爲  
 シタル交換契約ノ如シ  
 夫レ贈與ニ付テハ受贈者ノ得ル所贈與者ノ失フ所  
 ナリト雖モ賭博ヲ以テ贈與ト比較ス可カラズ蓋シ  
 贈與ニ付テハ贈與者他ニ利益ヲ授與スルニ於テ心  
 意上ノ満足ヲ得受贈者ノ愛情ヲ得恩義ヲ感セシム

ルヲ得又ハ得ント望ムモ賭博ノ失敗者ハ毫モ勝者  
 ニ恩義ヲ加フルコトナク其愛情ヲ得ス却テ自己ヨリ  
 其對手ノ幸運ヲ得タル者ニ向ヒ私怨ヲ挾ムコトアル  
 ヘキナリ○此等事實ノ明瞭ナル之ヲ主張スルハ反  
 テ無用ニ屬スヘキナリ  
 賭博ノ負債ノ隨意辨濟ヲ取戻スコト能ハサルノ故ヲ  
 以テ自然義務ノ性質アリト稱スル者アレモ決シテ  
 爲メニ感ハサル可カラス○更ニ隨意ニ自然義務ヲ  
 辨濟シタルモ之ヲ取戻スコト能ハサルハ該義務ノ効  
 カノ一ナリトス(佛法第千二百三十五條、日本法案第

五百八十七條)○然レ此場合ニ於テ辨濟ヲ取戻ス  
 可能ハサルハ或ル他ノ場合ニ於ケルカ如ク自然義  
 務ナキモ理解スルヲ得ヘキモノナリ蓋シ賭博ヨリ  
 モ不法ナル一層顯然ニシテ約權者約務者共ニ道  
 義ニ反スルノ合意例ヘハ娼妓ニ約務ヲ爲シタル場  
 合ノ如キニ於テハ一方ニ約務ノ價格ヲ請求スルノ  
 訴權ナク又他ノ一方ニモ其隨意ニ辨濟シタル片之  
 ナ取戻スノ訴權アルコトナキハ敢テ疑テ容レサル所  
 ナリ○然レ此約務ノ自然義務ヲ生スルコトナキハ  
 異議ヲ唱フル者ナキ所ナリ

我輩ハ嘗テ第二編中醜辱ノ原因(*turpis causa*)ニ據リ辨  
 濟シタル所ノモノハ之ヲ辨濟シタル者ト之ヲ受取  
 リタル者ト共ニ醜辱アルキハ取戻スヲ得サルコトヲ  
 證明セリ(第三百八十七條註解)  
 賭博負債ノ辨濟ヲ取戻ス可能ハサルカ爲メニハ其  
 隨意ナルヲ要ス○我輩ハ辨濟シタル者ニ能力アル  
 ノ條件ヲ以テ此條件ニ附加シタリ  
 又本法ハ勝者其賭博ニ付詐欺又ハ詐術ヲ用キタル  
 場合ヲ例外トス○此場合ニ於テハ其詐欺又ハ詐術  
 ノ發顯前爲シタル辨濟有効ナラスシテ取戻ス可ト



得へキモノトス  
 賭者ノ面前ニ賭物ヲ提出シタルカ如キハ隨意ノ辨  
 濟ト看做スヘキナリ是レ恰モ勝負前條件ヲ附シテ  
 爲シタル辨濟ノ如シ故ニ失敗者其面前ニ其賭物ヲ  
 置キタル後忽チ之ヲ引去リタル者ハ他人ハ財産ヲ  
 奪ヒタルモノトシテ論セラレ盜罪ノ訴ヲ受ケヌト  
 モ背信罪ノ訴ヲ受クヘキナリ何ントナレハ賭物ハ  
 其掌中ニ在ルヲ以テ寄託物タルモノナレハナリ  
 此隨意辨濟ノ事ニ關シ或ル困難ノ現出スルコトアリ  
 第一借用金額ヲ以テ其辨濟ヲ爲シタルノ際其貸主

此借用金ノ使途ヲ知リタルハ貸主其貸金ヲ返濟  
 セシムルカ爲メ訴權ヲ有スルヤ  
 此問題ニ對シテハ可決ノ答辭ヲ附スヘキナリ何ン  
 トナレハ貸與ノ金額ハ借主ノ資産中ニ入り且ツ賭  
 博ノ負債ヲ辨濟シタル所ノ金額ハ恐ラク眞ニ其金  
 額ナラサルコトアル可ケレハナリ○唯タ賭者ノ一人  
 賭場ニ於テ賭博中失敗者ニ貸與ヲ爲シタル場合ヲ  
 例外トスヘシ是レ訴權ヲ生セサル賭博ノ所行ナリ  
 トス

又茲ニ名代人若クハ事務管理者ニ於テ實行シタル

賭博負債ノ辨償ハ如何ナル効ヲ生スヘキヤノ一問題ヲ提出スルヲ得

右ノ問題ニ付テハ名代人ニ係ルト事務管理者ニ係ルトニ従リ其答辭ヲ異ニスルモノトス若シ失敗者ノ名代ニ據リ辨濟ヲ爲シタルハ恰モ其隨意辨濟ヲ爲シタルト一般ナリ蓋シ名代人ハ依頼人ヲ代理シ而シテ依頼人ハ民法上名代人ニ對シ其辨濟シタル金額ノ返還義務ヲ負フヘキヲ恰モ辨濟スルカ爲メニ借用ヲ爲シタル如シ然レモ名代人辨濟ヲ爲サスシテ事務管理者ノ辨濟

ヲ爲シタルハ必要ナル費用モ尙ホ有益ナル費用モ存在スルヲ見サルカ故ニ該管理者ハ返還ノ爲メノ訴權ヲ有セス然レモ本人(博戯者)返還スルヲ以テ適宜ト思慮シタルハ該本人ヨリ返還ヲ受ク可シ蓋シ辨濟ハ任意タルヲ要スルヲ以テ規則ト爲セハナリ

敗者辨濟ノ爲メ動産物又ハ不動産物若クハ債主權ヲ附與シ勝者ハ此内ノ一ヲ奪取セラレテ他ノ物ヲ受ケサルコトアル可シ○此等ノ場合ニ於テハ勝者ハ奪取擔保又ハ讓受人ノ無資力擔保ノ訴權ヲ有ス可

キモノナルヤ如何最モ無資力擔保ノ事ヲ明瞭ニ約束シタル方或ハ商業手形ノ裏書ノ如ク其旨ヲ權證ニ記シタリシ場合ナリト仮想ス可シ

吾人ハ勝者ニ向テ斷然此二箇ノ擔保ヲ拒絕ス可シ何トナレハ辨濟ノ有効ナラサルハ博戯ノ訴權ヲ生セサルニ因レハナリ加之辨濟ノ有効ニ對スル訟求ハ語ヲ變テ云ヘハ博戯ノ訴權ニ外ナキナリ○敗者ハ自己ノ任意ニ辨濟スルモノニシテ其拂フ所ノモノハ其儘之ヲ受取ル可ク勝者ニ於テ辨濟ノ爲メニ附與セラレタル物ノ奪取ヲ受ケ又ハ讓渡シアリタ

ル債主權ノ辨濟ヲ受ケサリシトモ此等ノ事ニ付キ苦情ヲ述フルトヲ得サルハ勿論唯一部分ノ辨濟ヲ受ケタリトモ之レカ爲メ苦情ヲ唱フルト能ハサル可シ○此點ニ付テハ勝者ハ受贈者ノ有スル權利程ノモノヲモ有セサルナリ何トナレハ受贈者ノ爲メニ奪取擔保若クハ讓受人ノ無資力ノ擔保ヲ明瞭ニ約束シアリシハ之レカ爲メ權利ヲ有スト雖モ勝者ニ於テハ此約束ヲ有効ナラシムルトヲ得サルノミナラス博戯ノ義務辨濟ノ約束ト雖モ尙ホ之レヲ有効ナラシムルトヲ得サレハナリ

第八百十二條 官許ヲ經サル富講ハ訴權ヲ有セサル  
博戲及ヒ賭事ト同視ス可シ

又商品又ハ公ケノ手形類ノ定期賣買ニシテ雙方ノ  
者契約ノ初メヨリ其約シタル物件ノ分量引渡又ハ  
價額ノ辨濟ヲ實行スルノ意思ナク只相互ノ間ニテ  
相場ノ差額ノミヲ受授スルノ意思ヲ有シタルモノ  
ナルトカ事實上判然スルキハ其投機所爲ニ付テモ  
亦同一ナリトス

## 註解

第八百十二條 官許ヲ經サル富講ニ依據スル訴權ヲ

禁シタル條例ハ佛民法中ニ掲ケサル所ナリト雖モ  
之レヲ禁止スルノ意ヲ以テ該法ノ沉默ニ附シタル  
所ヲ補充セスンハアル可ラス實ニ富講ニシテ官廳  
ノ允許ヲ經サルモノハ博戲ノ如クニ否博戲ヨリモ  
一層嚴ニ罰セスンハアル可ラス(刑法第四百十條)富  
講ハ常ニ偶事ニ基クモノナレハ終始之レヲ罰ス可  
キナリ而シテ諸般ノ博戲ハ悉ク偶事ノ性質ヲ有ス  
ルモノニ非サレハ法律ハ唯偶事ノ博戲ノミヲ罰シ  
タリ○故ニ富講ニ關スル合意ハ不正ノ原由トシテ  
一切無効ノモノナリ、茲ニハ力量又ハ巧技ノ執行ニ

關スル例外アルコトナシ何トナレハ富講ノ偶事ハ此等ノ執行ト調合スルコトヲ得サレハナリ  
 若シ之レニ反シテ富講ノ允許アリシモノナルキハ其世話人勝者ニ對シテ當リ高チ渡スコトヲ拒ムルハ則チ裁判所へ訴出シテ強テ之レヲ渡サシム可シ是レ甚タ正當ノコトニシテ且常ニ恩惠又ハ有益ノ性質ヲ有スル起業ニ關シ其切符ノ名前人ヲ獎勵スル唯一ノ方法ナリ蓋シ若シ此ノ如キ性質ヲ有セサルハ官許ヲ經サル可キモノナレハナリ  
 本條第二項ハ商品及ヒ公ケノ手形類ノ價額ノ高下

ニ關スル投機所爲ニシテ賣買ノ正當ナル行爲ノ性質ヲ有セサルキハ之レヲ以テ訴權ヲ有セサル賭事ト同視セリ

法律ハ定期ノ到リタルキニ行爲ノ眞ニ執行セシモノナルコトヲ要セス、双方ノ便宜若クハ多少危迫シタル事情ノ爲メニ双方ノ者ヲシテ合意ノ日ト約束シタル定期到着トノ間ニ於ケル相場ノ差額ノ辨濟ニ因テ事業ノ規定ヲ決セシムルニ至ルコトアル可シ○  
 法律ハ佛蘭西刑法ノ規則(第四百二十二條)ノ推論ニ因テ同國ニ要スルカ如キコトヲ希望セス即チ同國ニ

於テハ双方ノ者合意ノ時ニ自己ノ處分權内ニアル  
 公ケノ手形類及ヒ對價物ヲ有シ若クハ引渡ノ日ニ  
 於テ此等ノ物ヲ有ス可キヲ要セリ而シテ我法律  
 ハ「初メヨリ」(即チ合意ノ日ヨリ)双方ノ者カ正當ノ行  
 爲ヲ爲ス「詳言スレハ引渡及ヒ辨濟ヲ實行スルノ  
 意ヲ有セシテ以テ足レリトス」○是レ蓋シ事實ニ付  
 テ決ス可キ問題ニシテ之レカ爲メ裁判所ハ結約者  
 ノ約束セル分量金額、其資産及ヒ此者等カ斯ル賣買  
 ノ合意ヲ爲スノ慣習ヲ有シタルキハ尋常其規定ス  
 ル所ノ方法ヲ斟酌ス可キモノトス

第八百十三條 被告人ニ於テ博戲ノ義務ニ原由スル  
 抗辨ノ憑據ヲ申立テサルキハ裁判官ノ職權ヲ以テ  
 之レヲ補足スル「ヲ得可シ」但シ其義務ノ原由ヲ契  
 約書中若クハ訴狀中ニ明記シアルカ又ハ事實上其  
 原由ノ判明ナルキニ限ルモノトス

## 註解

第八百十三條 我草案ハ本條ニ於テ佛法ニ疑團ヲ生  
 スル一問題ヲ裁定セリ何トナレハ凡テノ論者ハ吾  
 人ノ論スルカ如ク博戲ハ義務ノ不正ノ原由ナリト  
 ノ堅固ナル說ヲ認許セサレハナリ

然レモ前々述フル所ニ據レハ博戯ノ抗辨ノ憑據ハ假令ヒ被告人ニ於テ之レヲ申立テサルモ雖モ裁判所ヨリ其職權ヲ以テ補足スルコトヲ得可シト決定スルハ是レ當然ノコトナリ○蓋シ不正原由ノ證據ハ契約若クハ其他ノ情狀ニ據リ明瞭ニ發生スルコトヲ要トス

## 第二款 畢生間ノ年金

畢生間ノ年金ニ關スル法文ヲ舉示スルノ前ニ方リ簡短ニ其論理ヲ說述ス可シ  
實際歐洲ニ行ハル、年。金。契約ニ二種アリテ一ヲ無

期ノ年金一ヲ畢生間ノ年金ト云フ  
無期年金ノ契約ハ有利足貸借ノ一種ニシテ乃チ此契約ト共ニ說述ス可キモノナリ(次章ヲ看ヨ)○畢生間ノ年金ノ契約ハ其他ノ契約ニ類スルモノナレハ則チ其一種タル可キモノニシテ贈與ノ性質ヲ有スルコトアルノミナラス尙ホ凡テノ契約ト異ナリテ贈遺又ハ遺囑ニ因テ之レヲ設クルコトヲ得ルナリ而シテ年金ノコトニ付キ吾人ノ論述ヲ要スルモノハ即チ此種々ノ性質ナリ○年金ニ關スル法文ハ最も容易ニ了解シ得可ク且ツ最も簡易ニ其説明ヲ爲ス可キ

ナリ

附言 入額所得權ニ附設ス可キ畢生間ノ年金ノ

ハ既ニ其事項ニ於テ少シク論述セリ(第五十九條

及ヒ同條註解第八十九號)

「ラント」年金ナル佛語ハ羅甸ノ「レヤチユース」(入額)ヨ

リ來リタリ然レトモ一ヶ月若クハ一ケ年ニ拂フヘ

キ入額ニ付テモ亦「ラント」年金ナル語ヲ附ス可キ

テ注意ス可シ而シテ「ラント」ニ「アレラー」(年賦金)

ノ名稱ヲ下シタリ故ニ佛國ノ法文ハ勿論我法文(草

案)ニ於テモ「ラント」ト「アレラー」トヲ同視シタル

「往々」コシテ是レアル所ナリ

「アレラー」(シユ)ヲ生スル權利ニハ「ラント」ノ名稱ヲ附

シタリ故ニ「ラント」ハ基本ニシテ「アレラー」(シユ)ハ其

「フロイ」(入額)ナリ

年期無期ノモノナルキハ(是レ或ル例外ノ消滅原由

ヲ除却セス)貸借ト同シク確乎タル資本ヲ有スルモ

ノニシテ「アレラー」(シユ)ハ其利足ナリ又年金畢生間

ノモノナルキハ其資本ハ不確定即チ假定ノモノナ

リ而シテ其資本ヲ請求シ能ハサル「ハ唯」年金ノ權

利者ノ死去ニ因テ年賦金ヲ受クル權利ノ消滅スル



場合ニ於ケルノミナラス年賦金ノ義務者ノ盡クス  
 へキ義務ノ不執行ノ爲メ權利者ノ死去前ノ消滅ノ  
 場合ニ於テモ亦斯ノ如シ○然レトモ時トシテハ年  
 金ハ動産ト不動産トヲ問ハス凡テ其權利者ヨリ供  
 シタル資本ノ對價物ナルトアリ然レトモ此資本ハ  
 年賦金ヲ生スルモノトシテ見做サル、トヲ得ス何  
 トナレハ年賦金ハ權利者ノ生存中ノミ要スルニ過  
 キサルモノナレハ概シテ貸借ヨリ生スル尋常ノ利  
 子ヨリモ一層巨額ナレハナリ  
 又年金ハ其權利者ヨリ供シタル有益物ノ對價トシ

テ設ケアル片ハ是レ有償名義ニ於ケルモノニシテ  
 双務契約ノ結果タルト明カナリ而シテ年金ハ人ノ  
 生命ヲ減縮シ若クハ永遠ニスル所ノ偶事ニ從ヒ或  
 ハ永ク或ハ短キ期限間繼續スルモノナレハ其契約  
 ハ双方ノ爲メニ偶生ノモノナリ  
 若シ又贈與ニ因テ年金ヲ設定シタル片ハ其契約ハ  
 無償ノモノナレハ双務ノ性質ヲ有セス然レトモ亦  
 是レ偶生ニ屬ス可キヤ如何○數多ノ論者ハ凡テ偶  
 生ノ契約ハ有償契約ノ一種ニ過キスト主張シテ其  
 偶生ノモノニ非スト説キタリ○然レトモ偶生契約

ノ性質ヲ此ノ如ク制限シタルハ吾人其何故タルヲ見ス○又本章ノ初メノ正條ニ於テ吾人ハ利益又ハ損失ノ運命カ唯一方ノ者ノミニ存スル以上ハ其契約偶生ノモノタルニ充分ナリトノコヲ設定セリ然ラハ則チ茲ニハ殆ント双方ノ運命即チ損害アリト云フヲ得可シ其故何トナルニ先ツ贈與者ノ方ニ付テ見レハ受贈者永ク生存スルルハ贈與者ノ責任ハ受贈者ノ世生スル時ニ比シテ一層重大ナリ然レトモ受贈者ノ世生シタル場合ニ就テ見ルモ受贈者ハ何等ノ物ヲモ供給セスシテ唯年金ヲ受取ルニ過キ

スト雖モ其生命ノ長短ニ從ヒ或ハ年金ノ多額ヲ受ケ或ハ小額ニ止マルノ運賦ヲ有ス可シト云フヲ得サル乎

吾人ノ見ル所ニ於テハ此問題ハ實際上ノモノタルヨリモ寧ロ理論上ノモノニシテ吾人ハ深ク其説明ヲ爲ササルヘシ、又畢生間ノ年金ノ贈與ハ偶生ノ契約ナルト否トヲ問ハス其効力ハ同一ナル可シ即チ其成立又ハ組成ノ條件ニ付キ及ヒ贈與ニ制限アルハ其廣狹如何ニ付キ凡テ贈與ノ規則ニ從フヘシ而シテ該年金贈與ノ期限ニ關シテハ常ニ受贈者ノ

生命ニ制限セラレタリ  
 有償名義ニ於ケルト無償名義ニ於ケルトヲ問ハス  
 畢生間ノ年金ノ契約ハ日本ニ於テ大ニ行ハル、モ  
 ノナリト信セス何トナレハ法律上未タ之レカ規定  
 ヲ爲サ、ルニ因リ人民ニ於テハ不適法ノ行爲ヲ爲  
 スヤチ恐ル、トアルベケレハナリ然レトモ該契約  
 ハ新法中ニ認許セラレ、ノ効アリ○實ニ之レヲ許  
 スニ於テハ尋常ノ入額ヲ以テ自己ノ生活ニ充分ナ  
 ル財産ヲ有セサル者ノ爲メニハ一大便宜ヲ與フル  
 トアルベシ○例ハ既ニ老年ニ及ヒタル者三千圓

ノ動産物若クハ不動産物ノ資本ノミヲ有シ其入額  
 百圓ニ付キ拾圓トセハ一ケ年ニ三百圓即チ一ケ月  
 ニ二十五圓トナル可シ然ルニ其老年タル故ヲ以テ  
 有利ノ職務ヲ實行シ得サルトアルヘシ○然レモ毎  
 月二十五圓ノ收入ハ其需用ニ應シテ不足ナルトア  
 ル可シ若シ右ノ人其些少ノ資産ヲ遺留セント欲ス  
 ル子息又ハ近親ヲ有セサルニ於テハ百圓ニ對シテ  
 十圓(即チ一割)ヲラスシテ百圓ニ對シテ十五圓、十八  
 圓、或ハ又二十圓(一割五分、一割八分、又ハ二割)ノ畢生  
 間ノ年金即チ其年ノ老ユルニ從ヒテ一層巨額ナル

可キ畢生間ノ年金ヲ受ケテ其資金ヲ讓渡スルコトヲ  
 得可シ何トナレハ其死去ニ於テ年金ノ義務者ハ年  
 賦額ノ拂渡ヲ停止シ元金ヲ返還スルコトナカル可ケ  
 レハナリ○若シ又年金ヲ受ク可キ人カ相續權ヲ奪  
 フテ欲セサル推測相續人ヲ有スルハ即チ右相續  
 人又ハ相續人中ノ一人ト契約ヲ爲サシメ之レヲシ  
 テ豫シメ相續ノ利益ヲ有セシムルヲ得可キナリ  
 今ヤ爰ニハ贈與ヲ以テ畢生間ノ年金ヲ設定シタル  
 場合ヲ假想センニ即チ右年金ノ設定ハ贈與者ヲシ  
 テ會テ其元金ヲ失フナクシテ受贈與者ノ生計ヲ助

クルヲ得セシム可キモノニシテ若シ右ノ場合ニ於  
 テ贈與者豪富ノ資産ヲ有セルハ右ノ年金ノ爲メ  
 其費用ヲ節減セサル可カラスト雖モ右ノ年金消滅  
 後ニハ年金ヲ設定セサル前ト同一ノ富ヲ有ス可キ  
 ナリ  
 蓋シ右ノ條件ヲ以テスレハ畢生間ノ年金ハ老僕ノ  
 勤勞ヲ賞シ又ハ貧ニシテ老ヒタル者ニ其生計ノ安  
 全ヲ得セシムルノ良方法ナリトス  
 且ツ畢生間ノ年金ヲ設定スルニ讓渡シタルカ又ハ  
 與ヘタル元資留置ノ方法ヲ以テシ即チ讓渡殊ニ贈

與シタル元資ナ一時ニ交付セスシテ年々其幾分ヲ  
 給與スルノ方法ヲ以テスルヲ得可シ例ハ贈與  
 財産ヲ留置シテ其入額所得權ノミヲ設定セルカ如  
 キノ場合即チ是レナリ○又甲者ヨリ乙者ニ百金ヲ  
 與ヘ而シテ或ル割合ヲ以テ受與者ノ終身間只右百  
 金ノ利息ノミヲ拂フヲ約權シタルカ如キモ亦例  
 トシテ爰ニ説クヲ得可シ  
 今ヤ是ヨリハ本事項ノ法文ヲ説キ始ム可シ

### 第一節 畢生間ノ年金設定方法

#### 第八百十四條 畢生間ノ年金ハ動産又ハ不動産讓受

ノ代リ若クハ既ニ受ケタル又ハ將來受ク可キ勤勞  
 ノ報酬トシテ有償名義ヲ以テ設定スルヲ得可キ  
 モノトス

又贈與又ハ遺囑ニ因リ無償名義ニテ之レヲ設定ス  
 ルヲ得可シ

右贈與又ハ遺囑ヲ以テ年金ヲ設定スル場合ニ於テ  
 ハ其年金ハ恩惠處分ノ法式之レヲ爲シ及ヒ之レヲ  
 受クルノ能力並ニ處分シ得可キ財産ノ部分ニ付キ  
 定メタル無償ノ名義ニ於ケル所爲ノ特別規則ニ從  
 フ可キモノトス

## 註解

第八百十四條 有價名義ヲ以テ設定セシ畢生間ノ年金ハ右年金カ變態ヲ與フル他ノ契約ト大ヒニ類似スル所アルモノトス

故ニ若シ年金ノ得益者ヨリ金圓又ハ需用品ヲ供給スルルキハ右ノ年金ハ利付貸與ノ變態ニシテ只其利息ハ制規ノ利息又ハ普通合意上ノ利息ニ比シテ多少巨額ナルカ故ニ元金ハ全ク抛擲シ會テ之レヲ返還スルコトナキノ差アルノミ即チ之レヲ名ケテ元金損耗ノ貸與ト云フヲ得可シ

又年金ノ設定ニ於テ其年賦額ニ於ケル債主權ノ買渡ヲ見ルコトアル可シ即チ是ニテ讓渡シタル元金ハ右賣買ノ代價ナリ

若シ動產物又ハ不動產物讓渡シノ代リトシテ畢生間ノ年金ヲ設定セシニ於テハ右ノ契約ハ全ク賣買ノ性質ヲ有スルモノナリ然レモ其契約ノ原素ハ轉倒シ年金ハ絶ヘテ賣渡シ物件ニアラスシテ賣買代價ナリ而シテ賣渡シ物件ハ年金ヲ受クル爲メ供給シタル物品ナル可キナリ

此場合ニ於テハ賣買ノ總則ニシテ偶生契約ノ性質

ト相ヒ反セサルモノヲ適用ス例ヘハ奪取擔保及ヒ容積不足又ハ隱蔽ノ瑕瑾ノ擔保ノ如キ是レナリ然レモ損失ノ爲メ廢棄ヲ爲スト能ハス是レ其偶生ノ性質ニ反スレハナリ若シ又損失ヲ以テ廢棄ノ原因トスルカ爲メニハ定期ノ年賦額賣渡シ物件ノ通常ノ入額ヲ超過セス或ハ元ニ超過スルモ甚ク僅少ナルヲ仮定セサル可カラス是レ實際ニ殆ント之レアラサル可キ所ナリ

若シ毫モ年金債主ノ供給スル價額ナキ并ハ畢生間ノ年金無償名義ニテ設定セラレタルモノニシテ生存中ノ贈與ニ因ルニアリ又遺囑ニ因ルニアリ○此際ニ於テハ此等各所爲ノ固有ノ規則法式及ヒ基本ニ關スル規定ヲ適用ス

該法式及ヒ基本ニ關スル規則ハ未ダ本案ニ確定セス本編第二部ニ規定ス可キモノナリ

### 第八百十五條 畢生間ノ年金ハ其對價ヲ供給スル者

ニ非サル人ノ利益ニ約權スルヲ得可キモノトス  
右ノ場合ニ於ケル年金設定ノ契約ハ約權者ト約務者トノ間ニ於テハ有償ノ名義ニ於ケル契約ノ規則ニ從ヒ又約權者ト得益者トノ間ニ於テハ贈與契約

ノ規則ニ從フ可シ然レモ贈與ノ法式ヲ履行スルニ  
及ハサルモノトス

## 註解

第八百十五條 凡ソ有償名義ニテ畢生間ノ年金ヲ設  
定シタルモハ概テ其約權者其對價ヲ供給シタルニ  
因リ之レカ爲メニ年金ヲ設ケタルモノトス是レ最  
モ當然ノ場合ナリ然レモ一人價格ヲ供給シテ他ノ  
一人ノ爲メニ畢生間ノ年金ヲ設クルコトアリ  
第一茲ニ注意ス可キモノアリ即チ他人ノ爲メニス  
ル約權ノ有効ナルハ例外タルヲ以テ(看第三百四十

四條)約權者其例外ノ場合ノ一ニ在ルカ又ハ其畢生  
間ノ年金ノ設定ヲ受クル者契約ニ干渉シタルコトヲ  
仮定セサル可カラス

是ヲ以テ其契約ニハ三个ノ關係人アリテ二群ヲ爲  
シ之レカ爲メニ法律上二个ノ關係ヲ生ス即チ一ハ  
價格ノ附與者ト之レヲ受取り年金ノ負債主トナル  
者トノ關係ニシテ一ハ價格ノ附與者ト利益ヲ受ク  
ル者即チ年金ノ債主トノ關係ナリ○第一ノ關係ニ  
付テ之レヲ觀察スレハ其契約ハ有償名義ナリ何ト  
ナレハ畢生間ノ年金ノ原因トシテ供給シタル價格



ヲ受取ル者ハ其對價物ヲ供給セサル可ラサルヲ以テ無償ニテ之ヲ受取ルモノニ非レハナリ○又第二ノ關係ニ付テ之レヲ觀察スレハ其契約ハ無償名義ナリトス何トナレハ畢生間ノ年金ヲ受取ル者ハ其對價ヲ供給セサレハナリ

斯クノ如ク一个ノ契約ニシテ二个ノ性質ヲ具フルハ畢生間ノ年金設定ノミニ特殊ナルニアラス第三ノ人ノ爲メ約權ヲ爲シ又ハ第三ノ人約權ヲ爲ス所ノ契約ニハ必ス此性質アルヲ見ル

且ツ其關係ノ數人間存スル以上ハ無償ト有償トノ

性質全ク相矛盾スルモノニアラス故ニ附與スルハ有償名義ニテ讓渡スニ付テハ其能力ハ同一ナラサルヲアル可キモ二个ノ觀察ノ點ニ付キ之レヲ遵奉スルノ妨ケトナルモノニ非ラス

之レニ反シ法式ニ關シテハ其所爲原ト唯一ナルカ故ニ法律ニテ贈與ノ程式ニ依循ス可キカ將タ有償名義ニ係ル所アルニ因リ程式ヲ履行スルニ及ハサルカヲ定メサル可ラス本法ハ此第二ノ決定ヲ取用セリ

猶ホ斷定ス可キ一ノ困難アリ而ルニ本法之ヲ斷定

セサルハ原則ニ照サハ自カラ眞ノ論決又得可キカ  
故ナリ

價格ノ附與者有價名義ニテ讓渡スノ能力アルモ附  
與スルノ能力ナク又ハ年金ノ利益ヲ受クル者其價  
格ノ附與者ヨリ受取ルニ付キ無能力ナル場合ニ係  
リタルヲ仮定センニ其契約ハ全ク無効ナルカ將  
タ單ニ利益ヲ受クル者ニ對シテノミ無効ナルカ○  
此問題ニ付テハ第二ノ論決ヲ取ルヲ可ナリトス何  
ントナレハ其契約ハ價格ノ附與者ト年金ヲ約スル  
者トノ間ニ有價トシテ効力ヲ生スルヲ得可ケレハ

ナリ故ニ其年金ハ價格ノ附與者ニ拂フ可キモノト  
スト雖モ其期限ニ至テハ義務者ノ年金債主タル可  
シト看做シタル者ノ生命ヲ以テ限度トス可シ○正  
ニ次條ニ至リ年金債主ニアラサル者ノ生命ヲ以テ  
年金ノ期限ト爲スヲ得可キヲ記ス  
又年金ノ高贈與者ノ處分シ得可キ財産ノ部分ニ超  
過スルキモ其論決ハ同一ニシテ年金ノ負債主ハ之  
ヲ利スルヲ能ハス其超過高ヲ贈與者ニ返還ス可シ

第八百十六條 畢生間ノ年金ハ其年金所得者ノ生命  
若クハ其義務者ノ生命若クハ又第三ノ人ノ生命ヲ

限度トシテ設定スルコトヲ得可シ

第三ノ人ノ生命ヲ限度トシテ設定シタル年金ハ有償名義ノモノナルキハ其年金組成ノ爲メ右第三ノ人ノ承諾ヲ必要トス但シ其承諾ナキ爲メ年金設定ノ契約無効ニ歸スルト雖モ既濟ノ年賦額ヲ取戻スコトヲ得ス

註解

第八百十六條 畢生間ノ年金ハ概テ一人ノ生活ノ方  
法ヲ確保センカ爲メ設クルモノナレハ其生命ヲ以テ限度トスルヲ理ノ當然ナリトス然レモ反對ノ場

合ナシトセス○例ハ義務者其生存間年金ヲ拂フ可キ旨ヲ約スルコトアル可シ此クノ如キ約權ハ頗ブル實際ニ稀ナル所ニシテ其理由タル或ハ義務者年金所有者ノ死ヲ以テ己レカ利トスルカ故ニ其死ノ速ナラシムコトヲ望ムノミナラス之ヲ速ニスルノ所爲ヲ行ハンコトヲ恐ル、ニ在ルコトアル可シ○然リト雖モ如斯約權ハ甚々淺慮ノ所爲ト謂ツ可シ何トナレハ若シ年金ノ義務者債主ニ先タチ死去スルキハ或ハ債主其生計ヲ失フコトアル可ケレハナリ  
又第三ノ人ノ生命ヲ以テ年金ノ期限ト爲スヲ約ス

ルコアリ此約權ニモ亦タ其實此第三ノ人ノ利益ノ爲メ其生計ヲ確保センカ爲メニ年金ヲ設ケタルコトヲ仮定スルニ於テハ利益アルコトヲ知ルヘキナリ唯ク價格ノ附與者若クハ贈與者其年金ヲ他ノ者ニ拂ヒ而シテ此者誠實ニ年金ヲ得ヘキ者ニ其利益ヲ與ヘンコトヲ欲シタリシナリ○例ヘハ一老人ノ生活安穩ナランコトヲ欲シタリシモ其浪費又ハ吝嗇ヲ恐レ其子ニ支拂フヘキモ父ノ生命ヲ以テ限度トセル畢生間ノ年金ヲ設定シタルカ如ク此際ニ於テハ子其父ヲ自己ノ家ニ養ヒ以テ其老後ニ至リ二個ノ共ニ危

險ナル極端ニ陷ルヲ防クモノトス其極端トハ懦弱ニシテ浪費ナルト吝嗇ニシテ自カラ需用ヲ欠クトノ二者即チ是レナリ然レモ利益較々少クシテ人斯クノ如ク其生命ヲ以テ他二人ノ相互ノ權利及ヒ義務ノ限度トセラレハチ好マサル場合アルヘシ(是レ自己ノ爲メ危害アルカ否ラストモ必ス心配ヲ生スルカ故ナリ)本案ニハ此人ノ承諾ヲ以テ啻ニ合意ノ有効ニ必要ナルノミナラス尙ホ其設定詳言スレハ其成立ニ必要ナリトセリ蓋シ其合意ヲ承諾スルハ即チ其生命ニ對シ毫

モ惡圖ヲ抱クモノアルヲ恐レサルカ故ナリ  
 其合意無効ノ結果ハ結約者ノ一方無効ヲ申立テタ  
 ルモ双方ヨリ嘗テ供給シタル所ノモノヲ返還スル  
 ニ在リ然レモ法律ハ既濟年金ノ返還ヲ准許セス是  
 レ其年金負債主ヲ以テ權利者ノ如ク必要ニ出ツル  
 ノ宥恕アルニ非ラスシテ人ノ死去ニ付キ利ヲ射テ  
 ル者ト看做スニ由ル○之ニ反シテ權利者ハ本條特  
 ニ區別シタルカ如ク契約ノ有償名義ナルモ其供  
 給シタル元金ヲ取戻スヲ得ヘキモノトス且ツ權  
 利者ニ此取戻權アルモハ義務者ノ射利ヲ抑制スヘ

シ

第八百十七條 又數人ノ生命ヲ限度トシテ年金ヲ設  
 定スルヲ得可シ但シ此場合ニ於テ其數人同時ニ  
 年金ヲ所得ス可キヲ約シ若クハ甲死シテ乙ト順  
 次ニ之レヲ所得ス可キヲ約スルヲ妨ケス  
 右ノ場合ニ於テハ入額所得權ニ關シテ定メタル第  
 百三條ノ規則ヲ適用ス可シ

## 註解

第八百十七條 本條假定スル設例ハ入額所得權ノ部  
 ニ於テ既ニ充分ニ説明シタレハ敢テ茲ニ詳論スル

ヲ要セサルナリ(物權ノ部第百三條)唯々年金ノ同時ノ權利者ノ一人死去スルニ義務者其義務ノ一部ヲ免カル、モノニ非ラスシテ年賦額ノ全部ヲ殘存スル者ニ拂ハサル可カラス但シ反對ノ約束アルニハ此限ニ非ラサルヤ勿論ナリ

我輩一時入額所得權ノ第五十條ニ照シ年金ノ未定ノ順次ノ權利者合意ノ時既ニ生存スルヲ要スルヲ定メント思惟シタリシカ遂ニ此條件ヲ要スル同一ノ理由アルヲ見サリシ蓋シ入額所得權ニ關スルニハ所有權ヲシテ其入額ヲ失フコト久シキニ過キサ

ラシムルヲ要スルニ由リテ然ルモノナリ若シ其入額ヲ失フコト久シキニ過クルハ其價格ヲ減殺スヘシ然レモ畢生間ノ年金ニ付テハ人ノ義務アルノミニテ所有權ノ支分アラサルナリ故ニ合意自由ノ原則其威力ヲ保存スルヲ要ス○加之ス無期ノ年金ヲ設定スルヲ得ル以上ハ一代又ハ數代繼續スヘキ年金ヲ設定シ得サルノ理由アルコトナシ

第八百十八條 有償名義ヲ以テ設定シタル畢生間ノ年金契約ハ或ル人ノ生命ヲ限度トシテ其年金ヲ設定シタルニ其人カ該年金設定ノ合意ノ際已ニ死去

シ居タル時ハ縱令ヒ結約者雙方ニ於テ其死ヲ知ラ  
サルモト雖モ右年金契約ハ無効タル可シ  
又右ノ人カ合意ノ際己ニ罹リ居タル疾病ノ爲メ合  
意ノキヨリ三十日以内ニ死去スルモトハ其契約ハ當  
然解除スルモノトス

註解

第八百十八條 本條ノ規則ハ畢生間ノ年金ニ偶生ノ  
性質ヲ保持シシムルノ必要ニ基キテ制定シタルモ  
ノナリ蓋シ若シ義務者其義務ヲ盡ス爲メニ依憑ス  
可キ人カ既ニ合意ノ時ニ死去セシ者ナルモトハ此人

ハ毫モ利益ノ命運ヲ有セサルベク且義務者ハ何等  
ノ損毛ノ危険ヲモ受クルヲ無ケレハナリ○故ニ其  
合意ハ原由無キカ爲メニ無効タル可ク從テ其供給  
セシ資本ハ返還ス可キモノナリ  
又本條ニハ双方ノ者年金所得者ノ死去セルトテ全  
ク知ラサルモト雖モ本條ノ規則ヲ適施ス可シト明  
瞭ニ述ヘタリ何トナレハ假令ヒ其知ラサルトハ惡  
意ニ出テタルヤノ疑團ヲ解クニ足レリトスルモ契  
約ニ關スル正當ノ原由ヲ創設セサレハナリ  
法文ニ本條ノ條例ハ有償名義ニ於ケル年金設定ニ

ノミ適用ス可シト掲ケタルハ大ニ注意シタルモノト謂ツ可シ何トナレハ贈與若クハ遺囑ノ名義ヲ以テ設定セル年金ニ付テハ贈與者又ハ遺囑者ノ相續人ハ資本ヲ受ケタルヲ以テ何等ノモノヲモ返還セザルベク且年賦金ヲ拂ハサリシヲ以テ何等ノモノヲモ取戻サ、ルヘケレハナリ然レトモ贈與ニ關シテ疑團ヲ生ス可キ唯一ノ場合アリ即チ動産又ハ不動産ノ贈與者既ニ死去セシ人ニ拂フ可キ畢生間ノ年金ヲ其贈與財産ニ貯存シタルヘキ場合はナリ○此場合ニ於テハ受贈者贈與者

ノ意思ニ從ヒ贈與ノ條件ヲ盡シ得サルカ故ニ正當ノ原由ナク利得ス可シトノヲ口實トシテ贈與者其贈與物ヲ取戻スヲ主張ス可シ○然レトモ此場合ニ於テハ吾人ハ有償名義ニ於ケル設定規則ヲ用ユヘキモノナリト信セス何トナレハ贈與ノ主タル原由ハ年金ヲ設ケンカ爲メニ非スシテ受贈者ヲ惠マントノ意思ナリ然ラハ則チ受贈者ニ於テ年賦金ヲ拂ハサル程一層恩惠ヲ得タルモノナリ數人ノ爲メニ年金ヲ設定セシキハ合意ノ時ニ方リ共數人總テ皆死去セシニ非サレハ本條ヲ適用セサ



ル可シ何トナレハ是レ唯タ偶事<sup>○</sup>即チ損耗及ヒ命運ノ除却セラレタル可キ時ナレハナリ  
 年金ノ所有者確然且ツ速カニ死亡ス可キ疾病ニ罹リタル場合ヲ以テ其所得者既ニ死去セシ場合ト同視スルコト當然ナリ而シテ此場合ニ於テモ亦利益ト損失トノ充分ナル命運ナカル可シ○佛蘭西法典ハ年金所得者カ年金設定ノ時ニ既ニ疾病ニ罹リ其後二十日ヲ經テ同病ノ爲メニ死去セシ場合ヲ以テ必要ナル危険ノ無キ場合ト見做シタリ○吾人ハ稍其期ヲ延ベタリ(一ヶ月ト定メスシテ三十日ト定メテ

リ)何トナレハ重病ノ爲メ危篤ニ至リ又ハ稍快氣ヲ催シテ其變劇シク到底死病ニ相違ナキモ其死期ノ延緩スルコトアル可ケレハナリ○疾病ニ罹リテヨリ既ニ二十日以上ヲ經シタリト雖モ醫師ニ於テ全快ノ見込ナキ病ハ夥多アルモノニシテ之レヲ陳述スルハ左程困難ナルニアラス  
 此設例ニ付テハ證據ヲ提スルニ多少困難アル可シ○而シテ其合意ノ無効或ハ單口其解除(甲附言)ヲ申立ツ可キ者ニ於テ年金所得者カ年金設定ノ時ニ既ニ死病ニ罹リ次テ其病ヲ以テ三十日內ニ死去セシ

旨ノ證據ヲ供ス可キナリ

甲附言 吾人ハ無効ト云ハソヨリ寧口解除アリト

云フ可シ何トナレハ契約ハ其組成ノ時ニ有効ニ

シテ解除ニ因テ其効ヲ失ヒタルニ外ナケレハナ

リ

乙附言 毎月同一ノ時日ヲ有スルニアラサレハ不

定ノ時日アル一ヶ月ト定メスシテ確乎タル三十

日ノ期限ヲ設定セリ

第八百十九條 年金ノ設定者ハ其設定ニ係ル無償名

義ノ畢生間ノ年金ヲ年金所得者ヨリ他へ讓渡ス可

ラス又他ヨリ之レヲ差押フ可ラサルモノト定メ置

クヲ得可シ

其讓渡及ヒ差押ノ禁制ニ關スル約款ヲ其年金設定

書中ニ明記シアルキニアラサレハ之レヲ第三ノ人

ニ對抗スルコトヲ得ス○又畢生間ノ年金ヲ養料ノ爲

メ無償名義ニテ設定シタルキハ縱令ヒ其贈與契約

書又ハ遺囑書中ニ讓渡及ヒ差押ノ禁制ヲ明記シア

ラスト雖モ該年金ハ當然他へ讓渡ス可ラス又他ヨ

リ之レヲ差押ユ可ラサルモノトス

此條例ハ財産贈與者ノ爲メ其贈與財産上ニ設ケタ

ル年金ニ適用ス可ラサルモノトス

註解

第八百十九條 凡ソ一個人ノ家産ヲ組成スル一切ノ  
財物ハ其所有者義務償還ノ爲メ之ヲ他へ讓渡シ得  
ク又權利者ハ其權利ノ故ヲ以テ之レヲ差押ユルヲ  
得可シ

然レモ又右ニ關シテハ例外アリテ存スルモノコシ  
テ或ル財産ノ讓渡及ヒ差押ヲ禁制スルコトアリ(第二  
十八條及ヒ第三十條、第一冊六十五葉及ヒ六十六葉  
註解參觀)○蓋シ右ノ例外タル第三ノ人ヲシテ奪取

ノ危険ヲ冒サシムルモノナルカ故ニ法律上勉メテ  
其區域ヲ限縮セサル可ラス然ラサレハ讓受人ハ獲  
得シタリト思惟スル物件ノ奪取ヲ受ク可ク又權利  
者ハ其權利ノ抵當ナリト思惟シテ差押エタル財産  
ヲ失フノミナラス尙ホ右差押ニ關シテ要シタル無  
益ノ入費ト時間トノ損失ヲ負擔ス可キヲ以テナリ  
即チ畢生間ノ年金ニ關シタル例外ハ二個アルモノ  
ニシテ該例外タル無償名義ヲ以テ年金ヲ設定シタ  
ル限ル可シ即チ其第一ハ合意又ハ遺囑ニ起因  
シタルモノ第二ハ法律條例ニ原由シタルモノ是レ

ナリ

蓋シ普通法ニ關スル右二個ノ變則ヲ設ケタルノ理由ヲ討求スルニ彼ノ畢生間ノ年金ハ養料ノ性質ヲ備フルモノニシテ年金所得者其直接ノ讓渡ノ故ヲ以テ又ハ差押ヲ生ス可キ義務ヲ約シテ其年金設定者ノ好意ニ出テタル安全ニ生活スルノ方法ヲ自ラ棄擲スルハ實ニ年金設定者ノ目的ト思意ニ違フモノナリトノコトニ在リ

然カレトモ右ノ例外ニ關シテハ法律ノ設定シタル區別アリテ存ス可シ

第一 若シ年金設定書中ニ右ノ年金ヲ以テ(養料)ナリト明記シアルカ又ハ之レカ明記ナキモ其養料タルコト設定書ノ總体ヨリ明瞭ニ生スルモノナルカハ該年金ハ當然他へ讓渡ス可ラス又他ヨリ差押ニ可ラサルモノニシテ別ニ右ノ約款ヲ記載スルノ必要ナシ蓋シ此ノ如ク定メタル所ハ年金設定者ノ恩惠所爲ニハ右ノ性質ヲ包含スル如キモノト推測シタルニ依ルナリ尤モ年金設定書中反對ノ意思ヲ表ス可キ言辭アルカハ格別ナリ

第二 若シ又養料ノ性質判然セサル片ハ贈與契約

書又ハ遺囑書中ニ讓渡及ヒ差押ノ禁制ニ關シテ明瞭ナル約款アルハニアラサレハ右禁制ノ生スルコトナシ

然ルニ有償名義ニテ畢生間ノ年金ヲ設定シタル場合ニハ右年金ノ讓渡及ヒ差押ノ禁制ヲ有効ニ合意スルコトヲ得ス是レ他ナシ右ノ合意タル年金所得者ノ權利者ニ其抵當物ヲ奪ヒ又ハ年金受讓人ヲ欺キテ讓渡ヲ爲シ其豫期セサル奪取ノ危険ヲ冒サシムルコトアル可ク即チ義務者ハ讓渡差押共ニ爲シ得可キ其財産ヲ讓渡シ次テ右讓渡財産上ニ讓渡及ヒ差

押ヲ禁シタル年金ヲ設定シテ自ラ利スルコトアル可キヲ以テナリ

蓋シ讓渡及ヒ差押ニ關スル禁制ノ約款ハ無償名義ニテ設定シタル年金ニ限リテ許ス所ナレハ之レカ爲メ年金所得者ノ權利者ヲ害スルコトナシ何ントナレハ右ノ場合ニ於テ年金ノ差押ヲ禁制シタレハ年金ハ曾テ權利者ノ抵當物ニアラス又讓受人共奪取ニ逢フノ危険ハ年金設定書中ニ記入シタル約款ニ依リテ充分ニ豫知ス可キモノナルヲ以テナリ(第二項)故ニ年金所得ノ權利ヲ獲タリト主張スル者ト雖

但一旦有年金設定書ヲ示サル、ニ於テハ年金ヲ讓受ケタルハ善意ニ出テタルモノニシテ嘗テ其讓渡ノ禁制アルコトヲ知ラサルヲ抗辨スルコト能ハサル可キナリ

法律ハ爰ニ無償名義ノ設定ニ係ル畢生間ノ年金ニ與エタル利益ニ關シテ尙ホ他一個ノ制限ヲ設ケタリ  
贈與者其贈與財産上ニ自己ノ利益ノ爲メ年金ヲ設定シ置クコトアル可キハ前已ニ見タル所ナリ嚴格ニ論スル所ハ即チ此場合ニ於テ贈與者ハ他人所屬ノ

物件上ニ新設ノ年金ヲ獲得シタルコトアラステ其舊所屬タル財産上ヨリ之ヲ得ルニ過サルナリ○故ニ贈與者其權利者ニ右財産ヨリ生スル入額ノ一部ヲ奪去シ得ルハ實ニ公義ニ違フタルコト云フ可シ是レ法律上右ニ關シテ制限ヲ設ケ無償名義ニ係ルモノナルニ拘ラス右年金ノ讓渡及ヒ差押ヲ許シタル所以ナリ

然レモ遺囑者其正當ノ相續人ノ爲メ遺囑財産中ノ一ニ設定シ置キタル畢生間ノ年金ニ付テハ前同一ノ論決ヲ與フ可ラス是レ他ナシ該年金ハ舊權利ノ

留置タルヨリ寧ロ新權利ノ設定ナルヲ以テナリ

第八百二十條 畢生間ノ年金讓渡及ヒ差押ノ禁制ハ

年金ノ設定者ニ於テ右二個ノ禁制中一ノミヲ約定

シタルキト雖モ二個ノ禁制連合シテ存スルモノト

ス

右ノ禁制ハ決シテ所得期限ノ經過シタル年賦額ニ

適用ス可ラサルモノトス

註解

第八百二十條 爰ニ法律ハ其説明ヲ與エサレハ疑團

ヲ生ス可キ二個ノ論題ヲ決ス可キモノト思惟セリ

第一 縱令ヒ畢生間ノ年金ノ贈與者其年金ノ讓渡

ニ關シテノミカ又ハ差押ニ關シテノミ禁制ノ約款

ヲ記載シタリト雖モ其記載セサル一方ノ禁制ニ付

テモ右約款ヲ包含スルモノナル可シ是レ即チ讓渡

差押共ニ年金設定者ノ憂慮スル所ニシテ前ノ如ク

解釋シ二個禁制共ニ存スルモノトスルハ其意思ニ

關シタル當然ニシテ且ツ適理ノ解釋タル可キナリ

○蓋シ年金讓渡ノ禁制ニ關シテ法律ノ推定セシ結

果ハ後日ニ見ル可キ所ニシテ畢生間ノ年金ハ期滿

効チ以テ免ル可ラサルヲ即チ是レナリ○即チ年金

消滅ヲ論スルニ當リテ右新性質ノ如何ヲ説明ス可  
シ

第二 畢生間ノ年金讓渡及ヒ差押ノ禁制タル年金  
ヨリ生スル入額ニ外ナラサル定期ノ年賦額ニ關ス  
ルヨリハ寧ロ年金所得ノ權利自ラニ關スルモノト  
ス然レモ若シ年金所得者其終身間ノモノナルト一  
回又ハ數回ノモノナルト問ハス滿期前ノ年賦額  
ヲ讓渡シ得ルニ於テハ年金設定者又ハ法律ニテ年  
金所得者ニ與エント欲セシ保護ノ効毫モアラサル  
可シ○是ヲ以テ滿期前ノ年賦額ニ付テハ只其一回

分ノミニテモ之レヲ他へ讓渡又ハ他ヨリ之レヲ差  
押ユルヲ禁セサル可ラス然ラサレハ年金ノ所得  
者其毎回所得ス可キ年賦額ヲ期限前ニ他へ讓渡シ  
又ハ他ヨリ之レヲ差押へ得可キヲ以テナリ○故ニ  
法律ハ其滿期前ニ係ル年賦額ノ處分權ヲ許可セス  
以テ巧ニ右ノ害ヲ豫防シタリ

## 第二節 畢生間年金契約ノ効力

第八百二十一條 有償名義ヲ以テ設定シタル畢生間  
年金ノ義務者其年賦額ノ擔保ノ爲メ約シタル抵保  
ヲ供給セス又ハ既ニ供給シタル抵保ヲ減少シタル



キハ年金所得者ヨリ契約ノ解除ヲ請求スルヲ得  
テ且ツ既ニ受領シタル年賦額ハ毫モ返還スルニ及  
ハス

或人ノ生命ヲ以テ年金權ノ繼續限度ト定メ置キタ  
ル場合ニ於テ右契約ノ解除ニ關スル確定裁判前ニ  
其人死去シタルキハ其解除ヲ言渡サ、ルモノトス

註解

第八百二十一條 年金義務者其年金所得者ニ對スル  
第一ノ義務ハ之レニ其約シタル年金ノ年賦額ニ付  
テ抵保ヲ供給スルニ在リ

蓋シ權利者特別ノ抵保ヲ約權スルハ他ノ契約ノ場  
合ニ於ケルヨリハ畢生間ノ年金契約ノ場合ニ於テ  
最モ屢々有ル可シ是レ他ナシ年金ノ所得者ハ入額  
ヲ増加セシカ爲メ其元資ヲ悉ク讓渡シ其讓受人ヨ  
リ年金ヲ受ケテ生計ヲ立ツルト最モ屢々アルヲナ  
レハ之レヲ受クル最モ確實ナラサル可ラサルヲ以  
テナリ  
本條ハ年金ノ義務者カ例ヘハ書入質又ハ保證人ノ  
如キ抵保ヲ供給セサルノ場合ヲ想像セルモノニシ  
テ爰ニテ義務者其義務ヲ怠リタルノ制裁ハ契約ヲ

解除スルニアリ又義務者最初ニ抵保ヲ供給シ後日故意ニテ右ノ抵保ヲ減少シタルモ其制裁ハ契約ヲ解除スルニ在ルナリ

蓋シ最初一見スル所ニ依レハ爰ニ法律カ義務者其義務ノ條件ヲ履行セサルニ起因シタル解除ニ關シテ更ラニ原則ヲ設ケタルハ實ニ驚クニ堪ヘタリ然レモ又之レヲ解説スルニハ特別ノ理由アリテ存スル所ニシテ即チ己ニ第八百二十四條ニ於テ解説セシ如ク義務ヲ履行セサルニ起因シタル解除ハ原則上畢生間ノ年金契約ニ於テ生ス可キナラサルモ

爰ニテハ例外ヲ以テ認許シタル所ニシテ若シ之レヲ許サ、レハ權利者ヲ保護スルノ最良方法ナキニ因ルナリ

凡ソ契約ヲ解除セシ場合ニ於テハ其契約ニ依リテ一方ノ者ニ於テ其獲得セシ物件ヲ契約ヲ爲セシ當時ノ形態ニ復シテ返付ス可キモノナルモ爰ニテハ解除ヨリ右ノ効力ヲ生スルコトナカル可シ固ヨリ年金契約ヲ解除シタル場合ニ於テ年金ノ義務者ハ其受收シタル財産ヲ悉ク年金所得者ニ返付セサル可ラス是レ他ナシ右ノ場合ニ於テ年金ヲ設定セシハ

有償名義ニ依リタルモノト想像スルヲ以テナリ然  
 レモ年金ノ所得者ニ於テ其受收シ又獲得シタル年  
 賦額ヲ返付セサルハ勿論或ハ普通利息ノ割合ヲ超  
 過シタルノ額ト雖モ返付スルコトナカル可シ○是レ  
 他ナシ年金ノ所得者其年賦額ヲ受ク可キ時期ニ際  
 シテ死去シ從ツテ年金ノ元資ハ悉ク年金義務者ノ  
 所得ト爲リ年金所得者ニ於テ毫モ益スル所ナキコ  
 アル可ケレハ右ノ如キ危険ヲ冒シタルヲ償トシテ  
 年金所得者ニ於テ既獲ノ利益ヲ保存スルハ實ニ正  
 當ニシテ且ツ適理ノコトタルヲ以テナリ

蓋シ右ノ論決タル佛國ニテハ尙ホ或ル學者間ニ於  
 テ疑問ト爲ル所ナリ是レ即チ爰ニ之レヲ記入スル  
 ハ最モ有益ト思惟セル所以ニシテ且ツ右ノ論決ハ  
 解除ノ總則ニ關スル變更ナルヲ以テ別ニ爰ニ之レ  
 ヲ明記シタルナリ  
 終リニ法律ハ年金ノ所得者其年金設定契約ノ解除  
 ヲ宣告セサル前ニ死去シタルノ場合ヲ想像セリ  
 爰ニテモ尙ホ普通法ニ違フタル變則アリ何トナレ  
 ハ普通法ニ從ヘハ總テ訴訟人中ノ一人死去シタレ  
 ハトテ爲メニ一旦訴訟ニ係リタル權利ニ變更ヲ生

スル丁ナク即チ裁判所ハ訴訟ノ本人ニ對シテ爲ス可キ宣告ヲ其相續人ニ對シテ爲ス可キモ年金設定契約ノ解除ニ關シタル訴訟ニ於テハ然ラサルモノナレハナリ

然レモ畢生間ノ年金ニ付テハ年金所得者ノ相續人ニ其權利ヲ移轉スルコトヲ得ス故ニ訴訟中年金所得者ノ死去スルモハ其權利消滅ニ屬シ解除ノ目的モナク又之レヲ爲スノ利益モアラサルナリ又其生命ヲ限度トシテ年金權ヲ設定シタル者始審裁判後控訴中又ハ控訴ヲ受理スルヲ得可キ期限内

死去スルモ亦右ニ同シク解除ヲ申渡スコトヲ許サ、ルモノニシテ死去ノ影響ナカラシムルモノハ只解除ヲ言渡シタル確定裁判ニ限ルモノトス○上告期限内又ハ上告中ノ死去ニ至テハ控訴ニ於テ言渡シタル解除ニ毫モ害ヲ及ボサ、ルモノト看做可キナリ

第八百二十二條 年金ノ義務者ハ其年金繼續ノ限度ニ取りタル人ノ存命中年賦額ヲ支拂フ可キモノニシテ其間年金權ヲ買戻スコトヲ得ス但シ反對ノ合意アルトキハ此限ニ在ラス